

# 川柳雜誌

主幹・麻生路郎



第八卷  
第十二號  
十二月號

京阪神 支部聯合 川柳會

吉例に依り川柳雜誌社後援の下に京阪神支部聯合句會を開催することになりました。句會は川柳作家が一堂に會すると云ふ歡びばかりではなく、創作向上に對するよき刺激を相互の胸に感受し得る歡びの源泉でもあります。川柳家諸氏は學つても御出席下さい。同時に川柳の道一步を踏み出さうと思はれる方々の御出席をも、歡迎の念を以てお待ち致します。

◇日時 十二月六日(日曜)

(午後六時半)

◇會場 日本橋俱樂部

大阪市電日本橋一丁目  
交又點北ノ辻東入南側

◇兼題

「元日」三句 路郎 先生選  
「舊園」三句 萬よし先生選

◇講演「川柳詩人の夢」 麻生 路郎

◇會費 金參拾錢

◇出席者全部に投句用箋

▼兼題及席題各三光に呈賞(但出席者に限る)副賞品多數あり

大阪市南區疊屋町周防町  
東入 永田里十九方

主催 支部聯合川柳會事務所  
後援 川柳雜誌社

川柳雜誌第八卷第十二號目次

文苑

くれのたわ言

長野 吉高(五)

感傷の泉(柳味を探る)五 福田山雨樓(六)

川の幅 阿部 閑生(四)

作句練習と題詠に就て 松盛 琴人(三)

海士の事追補 蛭子 生(二)

川 幽明無線電話(五) 秋 農 屋(六)

火 華……………(五)

月句の世界 路郎、ひろし、素人(二)  
琴人、町二、愚陀

地 訊きたい事孔雀猫綿谷摩耶火(八)

下 チンダン (三篇) 楊井 二南(九)

鐵 悲しき道化 加納山茶花(二)

よたりますのうみ 中西おさむ(三)

一路集(募集句)

疑 問 森 東魚選(四)

屏風

大島壽明選(四)

◇

續川柳家戸籍調

福田山雨樓(五)

西之町MEMO

橋本綠雨(四)

編輯の窓

路郎 生(三)

創作

近作

麻生路郎(一)

第一線

麻生路郎選(八)

春秋點

同 (四)

川柳塔

……………(三)

粒々集

……………(三)

光耀抄

麻生葭乃選(五)

近作柳樽

松丘町二選(三)

各地柳壇

……………(四)

題字

表紙「裸女」(自畫自刻)天西長三郎  
麻生路郎



近作

麻生路郎

酒まろりまろり大空のこころかも  
醫者が死を早めたこみを誰が知る

宇喜多翁に

天下茶屋席あたたまるひまもなし

花童子君に

函館へ海の碧さを横づける  
十二月うれしい風も少し吹け



月評

# 句の世界

路 郎  
ひろし  
町 二  
素 人  
琴 人  
愚 陀

春秋點  
琴人提出

## 涼しさを巡査花火へしばし立ち

蘭山

琴人——巡査と云ふ堅苦しい生活者、それにも人間味のほんとのものは絶えず後から何處かを突いてゐる。「涼しさを」と云ふものに憧れ、「花火」と云ふものに心を擱へられる。それは眞に人間としての憧れであらう。この句は巡査と云ふ様な殿めしい職掌柄の中に眞の人間味があると云ふ所に寸分の隙もない程に詠ひ盡されてゐると思ひます。

素人——少し賞め過ぎてゐる様だが、まあ琴

人氏の説に同意したい。昔の川柳に下女や居候が盛に詠まれた様に、巡査やルンメンの濫出を警めたい。

町二——俳句に「銀取り見てゐた巡査去りにけり」と云ふのがあつた様に記憶するが、それは冬の巡査を詠ひ、これは夏の巡査を詠つてゐる。涼しさと云ひ、花火と云ふのはありふれた言葉を使つてゐるが、それを巡査に結びつけたのでこの句が生きて來た。

ひろし——寫生句ですれ。奇麗に句は出來てゐるが、こうした句には餘り感興を覺えない。町二——「涼しさを」と云つてゐるから純寫生句ではない。しかも少々平凡は免れない。

素人——私達は文字の上に現れたゞけを以つて評をすると云ふ事は比較的容易いもの

であるが、これをもう一步深く突込んで作者の云はうとする境地そのものまで立ち入る。それは随分危険な場合もあるが、少なくともそこまで見るのが評をすると云ふ者の盡すべき義務であると思ふ。

路郎——巡査、花火、涼しさ、そこへ一種の氣分を出したのが、この句の全部である。整つてゐると云ふ意味から云へば整つてゐるが、それだけ強い刺戟が來ない句である。素人氏の下女、居候式に巡査を取扱つてゐる様に解釋をされるのも、そういうふ所にあるのであらう。しかしこの句としては巡査であるが故にこれ丈の味が出たのであつて、この句から深みとが、鋭さとが云ふものを求めるのは無理であらう。それで感じの點から云へば俳句にこれ以上のものがある事は想像に難くない。その點作者は一層の精進を要する。

### 第一線

路郎提出

## 赤すぎる夜着バトロンの好み

夕鐘

路郎——ちよつと變つてはゐるが、こうしたエロ氣分の句としては調子の上に張りがあるさ過ぎる。その缺點は「好みなり」と云ふ止め力に足りないのである。私はこの句をエロ味の句と云つたけれども、それ程嫌らしい感じは出てゐないのだ。所謂遊廓などの氣分は

微塵もなく、はつきりと二號とは見えない程度の後援者を持つてゐる女が想像される。ひろし——パトロンと云ふから 斷髪でもしてゐる女給でも想像します。尤も女給に限らずダンサーでもいゝ譯だが、結局「亭主の好きな赤鳥帽子」と同じ様に赤い蒲團で少しけばくしいが旦那の好みだと云ふだけのものではなからうか。

路郎——女給とかダンサーとか云へばある若さを感じる。その若さに對して非常に赤い派手な夜着をあしらつたとすれば、餘りに當り前の感じしか出てゐない。少なくともこの女は年増でなければならぬと思ふ。しかも女給とかダンサーとかではなくて、女將とか仲居とか、或ひはそれに次いだ女主人の水商賣の女と云ふ様なものが想像される。そこにパトロンの好みと云ふものが出、女の持つ若さよりも、より華かなエロ的な感じが流れて來てこの句をある程度まで生したのである。

琴人——この句の最も大切な生命とするものは「好みなり」であらうと思ふ。所が、この「好みなり」の下五がこの句の價値を幾分でも軽くすると云ふ難があつた。その他の點はよく私に解りましたが、この句をもう少し引緊めるためにこの最も大切である 下五を何と云はなければならぬかと云ふ點が、大切であらうと思ふが、今の所私には、これ以上の表現が見つからない。

素人——この句はエロ氣分を出そうとしたのならば失敗であります。然し僕はさうは考へない。僕はこの句に依つてゐる種のアルジヨアの低級趣味を嘲つたものではないのかと思ひます。句の構成法から行けば「赤すぎると云ふ言葉もおかしい。又「好みなり」と云ふのも力が足りない。「派手すぎず夜着パトロンの赤好み」とでもしたらどうでせう。

琴人——原句の方がましかもしれない。

路郎——訂正句もげつとしない。

町二——兎に角、この句からはその女性のパトロンの好みの儘に 従順であらねばならぬ憂ひ顔が覗いてゐる點が取柄であらう。それは「好みなり」の稍弱い表現によつてある。

素人——注意すべきことは、これは女の体験句でなく、第三者の詠んだと云ふ點であります。

路郎——素人氏の云はれたアルジヨアの低級趣味が巧く表現されてゐるか、町二氏の云はれた弱い女の云はるゝが儘になつてゐる状態が、はつきり出てゐれば、どちらであつても句は生きてゐると思ふが……。

琴人——町二氏のお説に 私は共鳴を感じます。

路郎——……どちらも 多少想像し得られる程度のものであつて、表現そのものからははつきりさうした 感じを受取ることは出来ない。下の「好みなり」を「好みにて」とすれば

稍救はれはしないかと思ふけれども、それでは少しく嫌味になつて來る。全然調子を變へてしまふか、全く他の表現法をかりければ單なる字句の構成ではこの句を生し難いと思ふ。

近作 柳 樞

素人 提出

散らばつた團扇の骨に五燭光

夜 王

ひろし——内職をしてゐるらしいが、五燭光と云ふのは無いから可笑しいと思つてたんだが、暗い電氣だと云ふ意味だと思つてそのまゝとして置いたのだ。

素人——勿論五燭光は 大阪にはありませんが暗い燭光の電氣と云ふ意味でせう。又團扇の骨を内職にしてゐると云ふのは 大阪には珍らしい事でありませう。

ひろし——團扇の骨を内職にしてゐるのではなく、團扇張りを内職にしてゐるのであります。

素人——團扇の骨と云ふことに依つて、内職を直感されたひろし君には感心しますが、團扇を張る事を内職にする場合には、骨が散らばつたりするものではありません。日本で一番團扇の骨の安物の産出する所は、俗に讃岐骨と云ひまして、丸龜を中心とした界限に殆んど女の内職として中流以下の家庭では骨

を削つてゐるのであります。今はそんな事はないでせう。丸龜の遊廓などで、は晝間女郎が骨削りの内職をしてゐるのであります。それで私は骨が散らばつてゐるといふ事は、團扇の骨を削つてゐる内職である、想像してゐるのであります。すると大阪にない五燭光も不自然でない様であります。然し句としてはある化しい家庭の情景を詠はうとしたのでありませうが成功した句とは云ひ難いですな。

琴人——その意味で、この句は成功してゐるのでせう。この句を讀みますと、浪人が傘の骨を張つてゐると云ふ様なものを想ひ出させるマンネリズムだと思ひます。

路郎——浪人が傘の骨を張るのは、何處の國ですか。これも傘の骨を張るのではなく、傘の骨を削るのではないか。僕は講談本で浪人が魚の刺や妻楊子を削る事は讀んだが、傘の骨を削る浪人は讀んだことはいない。

町二——琴人氏が云はれた様に、内職やその他貧しい家庭を五燭光で表現する手法は、既にマンネリズムである。唯この句では内職と云はないでそれを表現してゐる點をとります。嘗て土間に置かれた鯖の目へ五燭光が届くと云つた句を見た事があるが、参考までに作者へ素材の見附け方として申上げておきます。

路郎——何んだか陰惨な光景は出してゐる

が内職をしてゐる人間の正体が、僕には判然と浮んで来ない。その點この句は内職そのものを表し得た程度の句で、人間の心を刺すものを持つだけの句境に到達してゐない。作者自身の体験でない證據ではあるまいか。

町二——句の價値は別として、作者が一口も句の上で下手な理窟を云つてゐないと云ふ點は好感がもてる。

川柳塔

### 頬をすぼめて街の子が歩む

奈緒美

ひろし——交通地獄の都會、燥音の街、そうした小さいものを怯えさすものゝ多い都會の子の姿が、わざとらしくなくよく出てゐる。琴人——かほろさんの「大阪はひかれかけてもよい所」の反對であるが、而もその方がいゝ様に思ふ。併しこの句としての生命は、たしかにあると云ふことはうなづかせる。

素人——交通地獄といつたやうな具體的な考は、作者にばなからうと思ふ。都會の子のいらゝした神經や姿を表したことに、いけて、かなり成功してゐると思ふ。「ひかれかけても」の句からはうまさを感じ、この句からは或る詩を感得することが出来るやうに思ふ。

ひろし——僕が最初に、交通地獄といつたの

は、この句に關連して云つたのではなく、都會といふものを、説明に云つたのである。子供が頬をすぼめてゐることは、自動車がかはつたり、電車に驚いたりしてすぼめてゐるのではなくて、都會の子供の通有的氣持といつたやうなものがこの「頬をすぼめて」で表現してゐるので、素人氏のお説の通りと思ふ。

路郎——この句に對して「ひかれかけても」の例句を持つてきたことは、非常に縁遠いと思ふ。「ひかれかけても」の句は都會讀美句であり、この子供の句は、交通地獄と直接の關係を持つてゐない。都會に育てられ、青白い神經質といふものが歩いてゐるやうに感じた作者の心の動き方を、子供をかりて表現したのに過ぎない。

琴人——勿論交通地獄といふやうなものではなくても、都會生活そのものゝこみこみしたある壓迫された生活の中に育つてゐる子供、それは形をかへた交通地獄そのものだと思ふ。そこにかうした句がいやでも生れなければならぬ。これは作者がそれに氣づいてはゐないが、自然に享けたものが潜在意識となつて、それがこの句を生ましたものと思へる路郎——少し交通地獄に、捉はれてゐはしないか。都會人が神經質になり、こみこみした氣持、青い纖弱、といつたやうな行き方をしているのは、必ずしも交通地獄からくる刺戟ばかりではない。百貨店の地下室、映畫館の

ちか／＼する迫力、深夜のパー等々の如き近代的都會的混濁からくる末梢神經的刺戟が、そうした人間を生むのであることを思はればならぬ。少しむづかしくなりすぎたが、兎に角デリケートな句として興味を感じた。

素人——この句は都會といふ言葉をさけて、術の子とした所に云ひしれぬ露ひを感じます。

ひろし——街の子といふのは、ストリートガールのことではない。勿論。

素人——都會といふ意味を十分持たせながら、都會の字をさけて、街といふ字を使つたといふ意味です。

川柳塔

### もう呑むなと云ふ娘を仲仕

可愛ゆがり

裸 人

路郎——この句の娘は「こ」と讀むことは云ふまでもない。「可愛ゆがり」の「ゆ」をとつて「かはいがり」と發音したい。といふのは、上の句の「もう呑むな」といふ言葉、それから「仲仕」といふ階級から想到しても、俗語の「かはいがり」でない、全体の調子が調はない。文字なき階級の親子の愛のこまやかさが出てゐて、面白い句だと思ふ。娘の性格親爺の年配、仕事からすぐにうちへ歸つて、晩酌に生きる程度の仲仕としては、むしろ老

ひこんだ情景がよく出てゐると思ふ。素人——この句を家庭の晩酌とみるのは普通でありませうが、あざけない娘をつれて夕飯をくひにきた飯屋の店頭の情景と見た方が、一層情味があるやうに思はれるやうです。

ひろし——母親がない父子とでもいふわけです。それからこの娘を仲仕自身の子でなく、居酒屋の娘とみることも出来ないことにあるまい。併し私の知つてゐる仲仕に、交換手に行つてゐる十五六の娘があつて、毎晩その娘に「お父さん、お酒のみなさんな」と止められてゐる家があるが、その親子のことをよんだやうに思ふと、實際眞景である。

素人——色々とお説がありました。皆相當に私には同意出来るものが多い。私のこの句から受けた感じは、皆さんのお説のやうな内容が勿論持つて居りますが、私の直感はずレタリアの親子の美しい情景が、びんと感ぜられます。

愚陀——僕はこの句を讀んだ時に、ひろし氏が先刻云はれた居酒屋の娘と、そこへくる仲仕といふ情景が先づ頭に浮んできた。この句が仲仕親子であるとすれば、却て平凡になりはしないかと思ふ。娘といふ文字と、仲仕といふ文字をみて、しかもそこに何等の性的的な感じも出さず、朗らかに娘を愛してゐる仲仕の對度に、微笑ませられる。そしてこの句

の全体としては、何となく川柳のための川柳を作つてゐるやうな氣がしてならない。素人——私もはじめふと、居酒屋の給仕娘を思つたのでありましたが、この句を味讀しますと、やはり母なしの父娘とみることに妥當であるやうです。

路郎——「もう呑むな」といふのは禁酒せよといふ意味ではなくて、「もう一本つけてくれ」といふ愚に選つた親の健康を案じて、娘が止めてゐるのである。母のない娘であることも想像はされるが、母があつても母親に對しては、仲仕としての父が「酒をやめなさい」といふやうな言葉を容易に受けつづけるものではない。そこにすぐ喧嘩がおつづじまるのであるが、流石に娘に對しては、一目おかればならぬ程の愛情をふりそゞいでゐるのである。娘と仲仕と並べられたところで他人でないことは、娘がどういふクラスの娘であるかといふことを、その親の職業で云ひ表してゐるのである。居酒屋説も出たが、少しく考へすぎであらう。居酒屋の娘が「もう呑むな」といふ言葉を吐くとすれば、相當の年頃の娘で、仲仕がその娘にエロ的對度に出る程ぐでん／＼に酔つてゐるか、亂暴でもない限りは、少しく受取りにくい。それに「もう呑むな」といふ言葉が、その意味としては味のよい言葉となつてしまふ。従つてそれこそ平凡な句になり、寫生句としても、穿ちの句としても、興味のない句となつてしまふ。



# 感傷の泉

柳味を探る(五)

福田山雨樓

感傷ミ川柳——感傷ミ云へば寧ろ短歌の領域を思ひ川柳には少し細達ひの感じがするけれども、感傷的な句でしかも藝術味豊かな川柳も決して少なくないのみでなく、川柳でなくては詠ひ得られない深刻な感傷、川柳に依り表現されることによつて一層胸を打つ感傷がある。さうした感傷に陶醉してゐられる藝術境がある。

柳人も歌人も同じ人間であるから、感傷そのものには大した別はない筈であるけれども、句になる感傷が表現ミ云ふ窓を飛び出す瞬間に、その感傷は役割を替つて出た役口のやうな違つた登場振りを示すことになるのである。歌人が秋は寂しいこ感じるこは柳人ミ雖も等しく感じるに相違ない。それは同じ寂しさであるかも知れぬ。同じ寂しさであつても一方は歌人の筆になり、一方は柳人のペンになるこ不思議にも各々違つた持味ミ香氣ミを齎らして来る。同じく水のやうでもラムネミミカシ水位の差が生じる。これは決して詩句の形式や長短から云ふのではなくてその持味を指すのである。川柳には川柳ミ云ふの感傷、或ひは川柳らしい感傷ミ云ふものが特別にあるミ云ふのではなくて、誰でもが感じ何人の感情の中にも起伏する情緒、そのものから只川柳が持つイット乃至川柳作家が持つ川柳の本質感を通じて句の表現が熟するまきに、初めて川柳ミしての感

傷が矢を射るやうに飛んで来るのではないかと思ふ。

引續き庚辰柳壇の本誌からわれ等の感傷の泉を汲んで見たい

兄のあかるさにまけて歸りぬ  
もう蠅は追はで蒲團をかむるなり  
うてば響く我と信じて疑はず  
いつそ女給と二階でも借つてみよか  
靴もこころも汚れて歸る  
人間の味かえつかれ切つて寝る  
子が出来るまでの夫とひきくらべ  
爪切つて羨む事を忘れたら  
中年の戀に木賊の青さかな

鎌月  
見卓  
町二  
雨町  
閑生  
露斗  
杏女  
鮎美

冷々子  
旭虹  
大夢子  
雅幽  
湖舟  
路耶

妻は逝く  
涼み臺一人の親を取り圍み  
貧しき子等は雨に手を伸べ  
何見ても遙か離れし不惑かな  
秋の汗そのまゝ金になるらしい  
生きて居ることが氣兼ねになつてきた  
名をすて十七八の戀もせむ  
ほろにがき戀とはなれり八ツ手の葉  
夕櫻とんぼかへりがして見たし

同同  
路耶

同同  
路耶

月評で姐上のにせられたものに

去年より寒いに毛布毛がぬけて  
絶對安靜だ天井も落ちてく  
乳がこぼれるよ口をあきな  
さみしさにホタンを一つはずしけり

柳月  
長城  
継子  
觀月

欣女逝きて

ひろし

二月二十八日の日めくりのまゝなる  
この感傷篇は偶然にも寂しい陰翳をもつてゐる句が揃つた。  
數ある秀吟の中からもつこも心をかなぐる句を求めあさつて見  
るに、こんな顔をした感傷が残つたのだ。

そこで考へられることは淋しいか佻しいか或ひは暗いさかの  
心境から生れた感傷は他のあらゆる心境から生れた句に比して  
遙かに鋭い迫力をもつたものが多いやうに考へられることだ。  
この事は感傷の泉を汲ひいゝ川柳の生れて來る方面が決定され  
てゐる云ふ意味ではない。だが、感傷の世界にあつても人を  
動かし人の心をうつものは、矢張り眞實の言葉である云ふこ  
こだけは背かれる。ほんまうに強く感じ、強く藝術的良心に燒  
付けられた句想が、素材が最も強い力を發散するものだ云ふ  
この證左を擱へ得たわけだ。

それならこのやうな主として主觀句の場合、川柳の本質は一体何  
處から求めるべきか、感傷篇を彩る川柳味の方向と濃さとはどん  
なに探るべきか。この答へに對して自分が考へつた最初のこと  
は、主觀句の場合の川柳味は、句を兩手でさし上げてゐる作者そ  
の人が持つてゐるのだ、と云ふことである。句主がなつてゐな  
つたならば決して川柳味は生れてくるものではないと思ふ。なつ  
てゐないとは擱んでゐないこと、呑み込んでゐないことだ。假令  
作者何某と云ふものがわからなくつても、わかれば尚結構だが  
——微笑んでゐるであらうところの作者、沈み悲しんでゐるであ  
らうところの作者が、句の背後に働いてゐることが、句を通じて透視  
出來、句を透して躍動するときに初めて川柳味の全き鑑賞と吸收

とが果されるものだと思ふ。

このことは容觀の叙景を主とした句境にあつても、必須とは云は  
ぬが有効な調味料となるであらう。

それから先に川柳が持つイットミ云ふ言葉を使つたが、これ  
は所謂川柳らしい表現形式を指すのであつて狭い範圍で云へば  
川柳的技巧と稱することも出来る。この川柳的技巧は川柳家の  
誰もが一度は經驗するであらう興味ある修練の一つではあるが  
やゝもすれば常套的な小刀細工を弄するやうになつたり、川柳  
を拵らへものにする職人に墮したりするあぶなけがあることを留  
意せねばならぬと思ふ。

此の稿を起すに當つて、餅の例を引き川柳に於て川柳味なるもの  
は原料だと云ふ言葉を用ひてゐる。茲であの言葉に誤りがある  
と思はぬが、誤まれ易い言葉と思ふので一應布衍しておきたい  
と思ふ。

なるほぎ川柳味は川柳ミ云ふ表現形式の中核をなすところの  
要素ではある。川柳家が作つた句は何でもかでも川柳であるこ  
は云はれない。一句には必ず句主が把握したところの川柳味が  
込み込んでゐなくてはならぬ筈だ。けれどもその川柳味は原料  
そのものが宿命的に、ちやんこもつて生れるこいふやうな甘い  
たやすいものではないことを知つておかねばならぬと思ふ。糶  
米ミ云ふ原料もこれに水ミ熟ミそして力ミ時間ミが加へられな  
ければ餅にはならないのだ。況んやその味ミ形ミ巧みに且つう  
まく仕上げるのはミても素人のぎこちない慣れない手付きでは  
覺束ない次第である。一概に原料ミ云つても原料そのまゝでは  
何もならぬ。川柳味しかも新しい開拓を心掛けての川柳味  
を把握することが如何に容易ならぬわざであるかをお互ひ再吟  
味する必要があると思ふ。

日本人が餅を珍重する歴史ミ習性ミを思ふに、永劫日本  
人が川柳を離すものでない云ふ暗示を深くするものである。  
此事は力強く意識してもいい確からしさがあるに信する。(了)



# 第一線

路 郎 選

壁の暗さにかゝりはりはなし妻の皮膚  
 てのひらの卵のすがた朝の粥  
 食へるものは食へこ正午の笛が鳴る  
 同 同 同 同 同 同 同 同

農 夫

案山子焼き焼き絶望的な冬の空  
 同

臺所を守る妻

水道のネジが自由になるばかり  
 腹の兒に逢ひたい犬の夜を通ひ  
 ほんごうに母になる氣か産着縫ふ  
 考へがフト邪になる師走  
 秋晴を足袋に氣になる穴があり  
 同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同



訊きたい事

綿谷摩耶火

訊きたい事、知りたい事は山はごありますが、  
 さし當つては次ぎの二つ——川柳に理解の  
 深い天王寺動物園長さんの御答が得られた  
 ら幸甚です。

【問一】孔雀の尾の開くのはどんな理由か  
 らでせう。武玉川十一篇に、

○孔雀の尾見事に腹を立せけり  
 怒つた時かと思ふと、同書十七篇に、

○孔雀のきげん籠につかへる  
 といふ句があつて、少しホコトンでありませ  
 それから次手に思ひついたのですが、

【問二】猫が敵を威嚇する時に背中を立て  
 ますが、他に似た動物が、ありませうか。武玉  
 川二篇に、

○背中へ知れる猫の腹立  
 の句あり、狂句百味箆筒上巻にも、

○猫怒り背中ちからこぶを出し  
 の句あり、あれは力痛なんですか「了」

反動に大の男がぶつ倒れ  
閑人へ糞虫負けて動き出し  
同 琴 人

舊家に名畫を見る (三ツ)

先代の古書畫は虫に食はしこき  
もて餘しますすこ寶物庫の事  
同 同  
發明も出來ず自炊はまだつゞく  
同 新 水  
桃色の夢もはかなく女中に出

表情の薄らぐ妻の添乳を見  
同 同

藥瓶壽命を刻む筋こ見え  
同 同

外交員葉がはらりはらりこおちる  
同 同 緑 雨

大聲で澄みきつた空へ呼びかけん  
同 同

女から目隠しされる心やすさ  
同 同

菊を咲かして貧のゆかしさ  
同 同 雅 幽

上に薄く下に厚くこ言ふ手際  
同 同

鮮人も雜る借家の冬木立  
同 同

せき込んで兒を叱るゆううつ  
同 同 山 雨 樓

アバートの戀が朝日にしびれける  
同 同

デカメロンもてぬ男に讀まれける  
同 同

### チンドン三篇 揚井 二南

#### ●砥石こ慶應

ラザオは早慶第二回戦の佳境。  
散髪屋は鉄と櫛を動かすのに忙しい。

「砥石は要りまへんか安うしときまつせ。」  
慶應はビツチに見舞はれてゐる。

「慶應が勝つたら買ふけんぞ……。」  
砥石黙つて去る。

接戦の後慶應が勝つ。

慶應ビッキの散髪屋の晩飯はうまい。

——だが、砥石屋未だ姿を見せない——

#### ●畫の手品

街頭の畫。

手品師の手は器用に赤い玉を出没さす。  
群集の中から西洋人が一人前に出る。

五十錢銀貨と魔法の玉を交換した彼は嬉々  
として去る。

定價表に曰く「赤玉三十錢。」

手品師の曰く「あんな人は三十錢でも五十錢  
でも同じことです。併し皆さんには三十錢で

結構です。」

日本人の群集はまのあたりに金二十錢也の  
インチキを見せつけられた。

#### ●ポケットの無罪

彼氏は會社のヒクニックから未だ歸らな  
い。電報！(短針は十一時をいさゝかはみ出  
してゐる)

「コンヤトマルカモシレヌ」夫の友人から  
一果して妻君の顔は曇る。

エンジンの溝みるうちに據がりて  
支那芝居臺詞の區切銅羅を打ち  
支那芝居青龍刀を持つ重み  
夜々に絹靴下をさぎすます

京に遊びて

手を出せば手に鐘がなる京の暮  
スタートの足に二人の子がからむ  
笑つてくれさ降参をする  
淋しさに探しあてたは人名簿  
肋膜でよかつたなあ嬉ばれ  
催促に来るさ泣かされさうになり  
定紋はなつかし母さ呼吸があひ  
たばこ吸ふ閑な女の丸髻や  
善人にすぐれてあをき松の風  
落椿かはききりたる魂よ  
おかささん十人並を見てもぎり  
ふたりして母の氣分をまたそこね

同 裸 同 同 同 鮎 同 同 同 明 同 愚 同 柳 同 亂  
人 美 珠 陀 路 耽

(その頃彼氏は温泉宿で小間物屋を開いてゐる)翌朝、善長なる彼氏は恐縮の表情よろしく歸宅。  
妻君無言——  
彼氏極力宴會の盛況を報告して百方辨論に力める。

妻君無言——  
和服に着代へた彼氏執拗に青天白日を主張する。

妻君無言——

(併しその手はいとも機敏に上衣のポケットト、チヨツキのポケット、ズボンのポケットを探索する)

疊の上に現れた品物——定期、ハンカチーフ財布、そして妻君自身の寫眞——。

「貴方、お土産は……」

「あんまり急いたので、買ふ間が無かつたんだよ」

うまい!

妻君無言——

(併し今まで彼氏の目に見えてゐた妻君の二本の角は跡かたなく消滅してゐる)

其後妻君の寫眞は依然として忠實なる彼氏のチヨキの内面のポケット(まがふかたなく心臓の上)に這入つてゐるに違ひないのである。

### 悲しき道化

加納山茶花

何がなしに △

さびしくなれば出てあるく男となりて



それは地味な繪になる夫婦でした  
 贈られし時計の音にはけまされ  
 ぎう書いていゝか分らぬさいふ乙女  
 敵のつけしはむくつけき假面  
 あたりまへの煙さなりし牧師の死  
 ラツシユアワー傘の博覽會に似る  
 はたく音そろく朝の色を呼び  
 血痰へ氣の遠くなる眼をつむり  
 途行けば冬ぞ近しゴミカンの香  
 裸婦の寝てるる夢の風景  
 べつぎの中の金の勘定  
 食べ滓の葡萄がひきく匂ひ出し  
 海苔罐へ棒のやうな顔がうつり  
 秋空へ丸太のやうに寝て居度し  
 教科書を金紗なんか包むなり  
 またつけば今の心のかへりこず  
 土にしたしめばドンダリ落ちてゐる  
 貸附係大分息がかゝつてる  
 自分がせぬかの様に他人を語る女給

同 圓 同 丹 同 濁 同 晃 同 蒼 同 計 同 水 同 奈 同 同 同  
 角 路 水 卓 太 加 車 緒 美 艸 樂

「エ、エ、エ………」

「照ちんはさうした」

「別れたよ」

「同棲もしてゐなのに別れるわけがないぢあないか」

「いや契約を取消しただけだ」

「當にならん約束なんか初めからするのが間違つてゐる。俺などへんもそんなシヤホシ玉の様な約束をした事がない」

「それはあんたに許す女は初から浮氣でくるからよい、併し僕を對照とする女は、眞劍さがあると思ふよ」

「莫迦を言へ俺にも君と同じ二十四はあつたぜアハ………」

### よたりすと・のうと

中西おさむ

A  
批判といふものは批判者の立場でなすべきものではなく被批判者の立場でなすべきものである。

——だが、さうして仕舞つたのでは、批判者の名聲がなくなり被批判者の鞭撻がなくなつて仕舞ふ。

B

生活には一つのレベルがある。そのレベルの上にあるものもそのレベルの下にあるものもそのレベルをかへりみない。そこに双方

其の良をせめて小さくしてほしい  
十一月戀をせんにはうそ寒し  
細を買ふ女も朝の露地のもの  
集金人さびしがらずに蟲さ待ち  
呑む迄は幹事でありし彼なりき  
報ひられる日もあるものを猫イラズ  
口止に咄辨噓を考へる  
朝日ビル指して大阪うながせ  
◇  
大海へ乗り出す船が水を積み  
めかくしを取らふ汝も耳をほれ  
君なれば簡單なこてすがられる  
鉛筆をさがらす癖の子を見つめ  
すたれゆくものゝ一つに父の職  
さほけ顔急所つかれたさは見えす  
三菱の窓に牛尾さなつてゐる  
洋服屋待たして呉服屋へ拂ひ  
點晴の妙なく世話を恨まれる  
飛行機の下に島國瘦せ切つて

同 勝 同 佐 同 没 同 同 同 志 秋 紅 慕 變 民 春 翠 鶴  
二 保 食 郎 月 秋 人 郎 秋 夢 峰  
蘭 子 郎 月 秋 人 郎 秋 夢 峰

の躍進があり、恐怖がある。

Aといふ利己的な人間がBといふ利己的な人間に接したとき、AはBの利己主義を憤る。

—そこにAの本格的なエゴイズムがある。

D  
世の中には男のやうな女が随分ある。そのかはり女のやうな男の仲々多い、案じた事はないものである。

E  
本能を抑制することによつて優越な感ずる人達がある。また憂鬱になる人達がある。神様はこれらの人達を不憫に思はれるであらう。

F  
知つてゐて知らない振りをするのは、ゆとりがある。  
知らないで知つた振りをするのは、障がある。

かむる

一冊 拾五錢  
六冊 八拾錢

菊版 毎月發行

函館市青柳町五〇

龜井花童子方

函館川柳社

子寶を褒めりや内職出来ません  
 臨月を藤椅子に居て編んでゐる  
 きの母の子か臍出して演出して  
 遊ぶな言へば親御へ差し障り  
 食つてだけ行ける兵隊羨やまれ  
 大臣の墓参地盤を堅めに來  
 母ひみり兒ふたり今は女給をし  
 あつさりこしてゐて職人ほれられ  
 今日の日和よ山の皆まろし  
 道ゆけば覗きたい窓ありはあり  
 淋しさを犬に紛らし暮を待ち

奉公袋に馬の毛のある噂々々

馬の毛のあろう筈ない袋を見  
 持つて來た着物で妻はがまんする  
 一致してこそ石炭も山も抜け  
 そふ言へば煙突半分眠つてる  
 女親半分女にして育て  
 ゴム靴で通し僅かに貯めてゐる

日々城 同 然 同 柳 同 方 同 同 如 同 丁 素 翠 卯 虛 湖 耕  
 路 空 眠 兒 然 眠 空 路 萌 峰 三 白 山 民

年賀用葉書の發賣

奉仕品の短冊組合

畫仙紙 一番唐紙 五奉書

紅唐紙 五鳥ノ子耳附

新製品鳥ノ子 五キラ引

七種組合五十枚 送料共金六十錢 (前金に限り)

鳥ノ子キラ引地 五種組合十枚 送料共金三十五錢 (前金に限り)

金泥模様入り

組合短冊 (十二月一日ヨリ 十五日迄提供)

甲 三十枚 金五十錢

乙 五十枚 金五十錢

(御一名ニ各一組宛ニ限り前 金ニテ送料十四錢御加算ノ事)

大阪市東區安土町堺筋西入

川柳雜誌社 色紙 短冊 和正堂 電話本町二二六番 振替大阪九一七五番



# くれのたわ言

長野吉高

## 紋付

私の父は病弱で、加へて喘息に長らく悩まされてゐたので、寒くなるに大抵毎日寝てゐた。で、正月が来るに子供が私に紋付を着せられて、父の代りに名刺を持つて方々へ年始廻りをやらされた。さうやら木綿の紋付だつたと思ふが、其れを着るのが大變に嬉しかつた事を憶えてゐる。大きくなつての學生時代には、兄貴のお古の安ものゝ夏紋付の羽織を貰つて、こいつを盛に着た。寒中でも夏紋付姿颯爽として學校の講義も聴きに行けば、風呂屋へも行く、芝居の立見もやれば散歩もした。一度電車の中で、襟が折込んでゐるゝか、垢で黒光りする襟を女の人に直して貰つて恐縮した事もある。何時も紋付ばかり着てゐるので、知人の家へ遊びに行くに大分からかはれた。袂は火鉢の火で焼いて大穴が開いてゐるし、飴色に變色した肩の所が破れてゐるし——さにかくひさしい紋付だつた。からつ風の吹き

まくる師走なき、匆忙な人達の往來する中を、ペラ／＼の紋付に風をはらまして漫步する私の姿は随分珍妙だつたに違ひない。或時、この紋付を手離す心算で古着屋に見せたところ、古着屋も餘程驚いたさみえて、追錢を出してくれても其んなものはいらぬ、と言つた。其の後、この紋付はさうなつたか古い事なので忘れたが、寒くなるに今でも時々思出す。

## 文字

恥ざらしたが、私は字が下手である。私以上に字の下手なのに恩師宮原先生がある。こんな事を書くのはさうかと思ふが、眞實だから致方がない。あれ程學者で、下手な字を書く先生が妙に私を悦ばせる。近頃は變な氣になつて、字の上手な者は何處か凡俗に見える。勝手なねつかも知れないが、拙い字を書く人ほゞ超人に思へて親しまれる。亂暴な字を書く人、拙くも解り易い字を書く人がある。勿論後者がいい。劇作家の額

田六福氏が、募集脚本の選定をする時、字がきたなくて解らないのが有るのには弱る、ミ大分こぼしてゐるが同情する。私は選者こいふやうな仕事をした事が無いので十分には判らぬが、これはなかく辛いだらうと思ふ。本誌あたりは投句が随分あるらしいが、解り難い文字で持込まれた句には、選者も困るこゝと思ふ。一頃、私の書く文字が讀み難いこいふので方々から小言を喰つた事がある。これには閉口して、以後ごんな原稿でも自分で明瞭第一を王として書いてゐる心算である。これでも誤植されるこなるこ一体私はさうすべいかのか。

## モンペイ人形

山形のある女の人から、モンペイ人形を贈られた事がある。彩色した粗末な土人形だがひごく私を珍しがらせた。モンペイこかいふ袴の下をくゝつたやうな妙なものをはいて花籠を持つてゐる。これより以前、同じくモンペイをはいた女のエハガキを寄越してゐてくれたが、其の美人エハガキより人形の拙い道化た顔つきに興味をもたせられた。私は人形の蒐集家じもなければ、また特別に興味を持つ鑑賞家でもない。で、人形と言つてはたつた一つこの贈られたモンペイ人形があるに過ぎないが、私は之を大切にしてゐる。贈つてくれた人に對する禮儀だと思ふからである。本誌五月號、雅幽とかいふ人の句に「市松人形どの男にも惚れて居ず」といふのがある。とにかく人形は、饞舌つてくれなだけで私は好きだ。曾つて三田村鳶魚氏が、額田氏を介して私に突然書信を寄せた事がある。私の書いた「支那戯曲史」の中の支那

傀儡に就ての質問で、李文權氏に逢つて質したが不明といふので突然おたづねした次第、と言ふのである。支那の人にすら解らぬ事が、私に十分解らう筈はないが、私の事だからぬらりくりと、満足な返事ではないが、兎も角、お答へだけはして置いた。同じ人形でも演劇方面の、別して支那のもの等となると、モンペイ人形を見て悦んでゐるやうな譯にはゆかぬ。

## なぐり書

求められる時、又は自分で勝手に何かに書く時、私は大抵定つたやうに一つ事をなぐり書する事にしてゐる。日月燈江海油風雷鼓板天地一番戲場舜舜旦文武末莽操丑淨古今來許多脚色さう思つても愉快な文句である。だから、一生こればかりをなぐり書するかも知れない。

## み佛の言葉

釋迦は、サンスクリット語で説教して廻つたんだらうか、ミ屢々問はれる。私だからつて其んな事はよくは知らないが、多分釋迦は當時の東部ヒンドスタンの方言を用ゐてゐたものだらうと思つてゐる。ドイツのオルデンベルグは、この事に就てやはり同様の研究發表をしてゐる「輕快で耳障がよくサンスクリット語と違つて子音を殺してなめらかにする言葉」だつたらしい。彼の所論に従へば *Mittels* (自由又は解説) と言ふ代りに *Mittels* と言ふので、つまりイタリア語とラテン語との違つた語尾傾向を母音で終らせやうとするのに似てゐる。成程、

これなら如何にも軽快である。近頃、或る尖端ガールが「もつてゝがんさい」と言つて私を面喰せた。これは「持つて行つてご覧なさい」と言ふ事ださうだが、流石の私もこれには仰天した。彼女は至極自然になめらかにこの言葉を使ふ。いや、他の言葉も大抵この調子でやつてのける。尖端女性は段々釋迦に近づいて行くらしい。

## 近 眼

私は四度さいふひさい近眼なので、大分これで悲喜劇を演じて來てゐる。眼の悪い者程不幸な者はないさしみ／＼思ふ。本誌七月號圓角さいふ人の句に「近眼の人生深く掘下ける」といふのがあつたやうに思ふ。私は、其んなたいそれた人間になるよりも 平凡でも眼の健康者になりたい。十才前後の少年少女で、十六七才前後の中、女學生で眼鏡を用ゐてゐる者をよく見かけるが、其の度に私は暗然として此の不幸な少年少女に心から同情するのである。

## そのどつちかであらう

私は、自分の關係してゐる雜誌が來るゝ責任上必ず一度は眼を通す事にしてゐるが、この他に毎月寄贈される大小の雜誌、パンフレット、目錄等、さては書物類、餘り興味の無いものでもなるべくはページを繰つて見る。寄贈者に對する一の禮儀だと思ふからである。時によるゝ私の悪口の書いてあるのを發見する事がある。早大の西村氏だつたか、近頃はアバセチックになつて、自分の書物に就て何んゝ罵倒されてもなるべく立腹し

ない事にしてゐる、ミ大阪の新聞に書いてゐるが、これは洵に善い事のやうに思ふ。私も從來この主義で、自分の書く物に駭論を喰つても悪評を浴びせかけられても、相なるべくは腹を立てないで平氣である事にしてゐる。神経が遲鈍なのか、横暴で圖々しいのか、其のどつちかであらう。新村出氏あたりは、この方面では大分の古狸で、何か悪口されるゝ其れを會に語原探しをやる事にしてゐるさうだが、私なゝゝ違つてなかく眞似の出來ない横着ぶりである。

## 少 女

この頃、一見男の兒か女の兒か判らないやうな少女を見かける事がある。私にはこれがとても愉快だ。近來、一体に少女が非常に美しくなつて來た。美しい、言つても顔ばかりの事ではないが、ミにかくこれは都會ミ田舎ミを問はずスポーツが割合によく行はれる結果であらうと思ふ。私は少女が好きだ。だから近頃のやうに少女が美しくなつてくれる事は、何よりも私は嬉しい。私の書くものには大抵一人づゝ少女が出て來るが、妙なもので少女を書入れないゝ張合が無い氣かするのである。世界中の少女に人形を持たして、一人づゝ象に乗せ、富士山の麓で少女行列式をやつてみたい、ミ何時も思つてゐる。そんなものであらう。あてにはならないが、すつと暇が出来たら、ホーソンのやうに、いやもつと素晴らしい少女讀物を書いてみたいとも考へてゐる。確かイタリアのルカ・テラ・ロピアの彫んだものだと思つてゐるが「歌うたひ」といふのがある。少女が二、三人肩を組むやうにして、一冊の樂譜を見て無心に歌を唱つてゐるものだが、これ

は私の心を強く打つ好きな作品の一つである。目下「柳の絮」に書いてある茂里菜といふ少女のモデルは、大体あれに書いてあるやうな見だが近頃は春がぐんぐん伸びて、このまゝでゆくとやがては私より遙かに春が高くなりしめぬかと心配してゐる。半女半男のやんちゃな茶目だがながく可愛い。來年は十四になる。次第に少女を奪つてゆく「時の流れ」を心から憎みたくなる。

## 戀人

作品を通じて想像してゐる人に會つて見ると、割合に平凡だつたり感じが悪かつたりする——よく人が言ふ。言はれる事を恐れるのではないが、然し私はなるべく會はない主義である。この爲めか、私の事を變人だと言ふ人がある。さうかも知れない。本誌七月號に鶴峰といふ人の「御主人は變人です少女中が出」の句、雨町といふ人の句「氣をわるくさせて變人歸つて來」等を見て一寸苦笑させられた程である。作品を通じて私といふ者を想像してくれる方が有難いやうな氣がするが無論これは私の我儘からで、他の人は其の性格、立場等で私とは同様には言はれないかも知れない。死んだ芥川龍之介あたりも、初對面の人には一寸逃げ腰の人だつたやうにも思ふ。ジョルジ・サンドが始めてシヨパンに會つた時、シヨパンは眞赤な顔してへごもごしたさいふが、これが普通の會見であつたら、定めしシヨパンは世にも意氣地の無い人間に見えたであらう。ドレツタントの無用な、時間潰しな、好奇半分な面會を、私は極力排斥してゐる。

## へんやがらうじやう

麻生路郎氏のご家庭は、大變に賑やかで然も和樂そのものゝやうに思はれる。本誌十月號に霞乃夫人の書かれた「小さい作

家」さかいふのを拜見して、私は大變に愉快であつた親御さんてのご夫妻は、さういふお感じを持つてゐられるかは知らないが、私は近頃になり、少し誇張して言へば「涙ぐましい——程の心持を抱かせられた。これは、單に子供好きとしての私の安易な一の感激のみではない。これまた少し大袈裟に言へば——麻生氏の川柳精進は見えないところに来て美果を結んでゆくとも言へる。こんな立派な事はない。善きご両親を持つたアト君さりとちやん、善きお子供さんを持たれたご夫妻は何よりご幸福である。うらやましい。

## 近頃心細いこと

こゝ數年來、體の調子が狂つて困つてゐるが、近頃は特に衰へが來たやうに思ふ。さして老はれた齡でもないと思ふが、物忘れをしたり、痼疾が分けて苦しくなつた。餘り健康な生れつきではないが、其れでも一時はこれで元氣な時もあったのだが——だが、まだく死なぬ心算である。私の仕事はこれから本舞臺に入るのだ。

## おわび

「柳の絮」は今月少々書きそびれた。埋合せに勝手なねつを吐く事にした。新春からは更に硯を新にして書くつもりである。無論お世辭だとは思ふが割合好評だこの事で、自分でも少々鼻くすぐつたい氣がする。面白いとか滑稽なまじか單にさうした味のものではなく、また其んな考へで讀んで貰つては困るし私も亦さういふ意圖では書いてゐない。要するに、こんなものは私のやうな馬鹿が書くので聰明な人の書くものではない。定めし欠伸をしてゐる人が多いことと思ふ。



春

秋

點

路郎選

掃き清められて落葉の二三枚

石川

白花子

路生

マネキンへよる月よる月の淫らなる

同

ドライブにヘットライトの雨もよし

同

借りもの云はれる程によい着物

同

六角堂幾何學的に募れて行き

同

捨鉢な後姿にさせて置き

神戶

妓丸う辨財天を信じ切る

京都

秋の灯に娘の肩がすほめられ

同

御僧の缺伴水晶音立てじ

同

一日が無事な主任の次ぎの次ぎ

同

抱いた子の云ふまゝ街の黄昏れを

明石

癩癬を押へに月へ出たのです

東京

夕風へ靜かに菜葉流れてる

同

大けさに子をあやして見付られ

同

童貞を擲擻してマダム風呂へ行き

大阪

鮎通の指にある鮎氣懸りな

同

大衆の支持鐵窓の暗からず

同

貧相に笑へば煙草の煙を吸ひ

大阪

突然の鹹首誇りあるタイピスト

大阪

漬物の味を讃めれば笑ひこけ

同

昇給へ一本つけた膳が出来

同

一蹶の合ひ間へ秋の風が吹き

堺

ストローは底に尾籠な音を立て

京都

父の病あらたまる

同

子供さへ悪い量に憤慨し

同

雨しきり父のかすかな脉こ寝る

同

落葉吹くさ中も戀はよいものぞ

大阪

女専から歸れば近所禮をする

堺

一足の足袋萬引に冬が来る

同

童貞を奪うた女中を怨む此の頃

同

圖に乗つて鼻の脂が光るなり

大阪

此頃の元氣かきおきかいてゐる

同

戀文へまづペン先をかへるなり

同

養生の片一方で戀もする

同

不景氣さ妻よ母には知らすまい

京都

養生の片一方で戀もする

同

づるい眼ぢあない營養不良です

神戸

養生の片一方で戀もする

同

天來

同

コムバクト鼻を叩いた自己慰安  
 宣傳の樂隊半音程違へ  
 氣樂さは妻に弾かせて小原節  
 出世した友事務的に話すだけ  
 煩悶の何處に捨てよかピルの窓  
 夕立に雲の騒ぐも面白し  
 町内で質屋の主人眼をそらし  
 宰相のもたれた机なでてみる  
 案内をいつまで待たす靴のひも  
 動物の姿態が戀の名にかくれ  
 惚れる丈の戀繰り返し繰り返し  
 北風へ鶏一羽よろけたり  
 名月を一句詠みたい面構へ

大阪 柳次  
 大阪 無鬼  
 大阪 菊路  
 名古屋 きよし  
 大阪 洋々  
 大阪 小柳子  
 大阪 四五磨  
 大阪 繁坊  
 大阪 吐旬坊  
 石川 しよし  
 大阪 三碧  
 京都 一正  
 石川 一寛

やうやうに頬紅にだけ若さあり  
 奇蹟的効果は俺に恵まれず  
 妻さして見たい女さ女を居る  
 思ふまい俺はやつぱり内氣だつた  
 青春の歩みを麻雀寮に止め  
 決斷のにぶい課長へ智慧を貸し  
 怪奇なる事件を讀んだ夜の夢  
 人の出が今盛りなり特價デー  
 ガッチリ質屋錠前かけて留守  
 五十錢で歸れる云ひ夜を更かし  
 尻に帆をかけよか腕をまくらうか  
 まんまるな月へはしやぐ子澤山  
 まあくゞみ押さへて生る不甲斐なさ

東京 ひさし  
 大阪 明晴  
 金澤 今雨  
 大阪 六華  
 大阪 あや美  
 大阪 利生  
 養ヶ池 赤外子  
 石川 溪鶯  
 大阪 素月  
 大阪 みつる  
 鳥取 暢山  
 養ヶ池 巷巴  
 養ヶ池 梨風

# 近作採稿

## 町 一一 選

一切の西瓜に心見すかさされ  
 血痰が無智を喘ろてる如く出る  
 せめてもの慈愛を筆に托すよし  
 生卵その處女性を割る快味  
 妻や子のあるを承知の戀さいふ  
 抜け殻を提けてお嫁にゆくこいふ  
 不平ある男へ蠅が来てしまり

養ヶ池 沙門  
 同 同  
 同 同  
 同 同  
 同 同  
 同 同

忍従の底に硝子の破れる音  
 下積にされてゆくのも人生よ  
 信念のきこかうたがふすきがあり  
 わびしきは父の入歯がこり鳴る  
 葉のしけみうぶな娘の情熱よ  
 のびをして欠伸の底か愚をぞ知る

大阪 卜居  
 同 同  
 同 同  
 同 同  
 同 同  
 同 同

或る夫人へ







勝手口ねまきのまゝの朝の豆腐  
 蜘蛛の巣へ捕へた蠅をつけてやり  
 家出なきほつこけに父呑んでゐる  
 貧しい云はず我子にうなづいて  
 ごまかしの利かぬ唄なら歌はぬ氣  
 正道を歩むは口の先ばかり  
 ごたぶんにもれず親爺に泣つけり  
 鐵砧の火花よ何が氣にくはぬ  
 バス過ぎて元の淋しき町に居る  
 親方は老眼鏡を二つ持ち  
 ぎょうにでもなれは哀れ捨身なり  
 蒸暑き工場に五年瘠せてゐる  
 日曜日二人で遅い晝を喰ひ  
 白狀をしてから娘陰氣なり  
 二足あゝ下駄二足共切れて居り

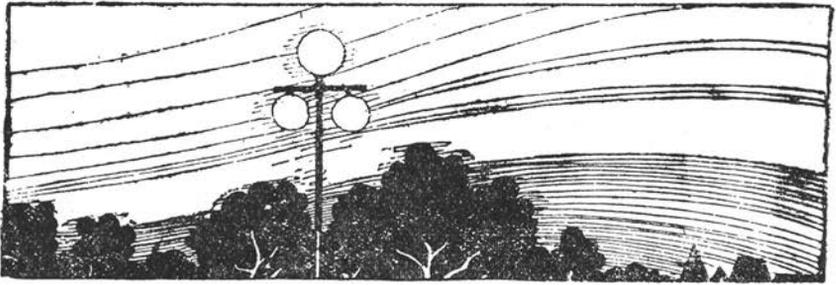
續川柳家の戸籍調

係 山雨樓

(一)姓名(二)雅號及別號(三)出生地(四)  
 現住所(五)生年月日(六)職業又は勤務先  
 (七)好きな句(八)自信の句(九)川柳以外  
 の趣味(一〇)配偶者及子供の有無(一一)  
 嫌ひなもの(一二)川柳に手を染めた年月  
 (1890) 池田雪峰  
 (一)池田利明(一)雪峰、登志秋、掃水庵  
 (二)三重縣飯南郡楠田村(四)同所(五)明

|     |     |                 |     |       |
|-----|-----|-----------------|-----|-------|
| 兵庫  | 普天  | 白粉の色さまぐくになる日傘   | 大阪  | 青兒    |
| 大阪  | 一騎  | 友達と疎にして秋の夜の机    | 郡山  | 右月    |
| 大阪  | 吳柳  | 云ひ出した手前割前押し返し   | 大阪  | 磨劍    |
| 大阪  | 光坊  | 菊活ける縁に小猫が来てねむり  | 島根  | 田綱緒   |
| 愛知  | 芙蓉  | つくねんご坐るへ秋の氣が冷える | 大阪  | 宵吉    |
| 大阪  | こも坊 | 筆も技巧よ叫びも虚偽よ     | 島根  | 幽明改傳重 |
| 大聖寺 | 醉羊  | 綿屑の中で妹よ痩せてゐる    | 尼崎  | 義郎    |
| 大阪  | 岩石  | 七十を越しても土にまみれて百姓 | 島根  | 紫光    |
| 高知  | 春水  | 公園の芝生に親子夢に入る    | 西宮  | 三代吉   |
| 大阪  | 寛柳  | イツトだねなごゝ奥様氣が若い  | 高岡  | かすま   |
| 愛媛  | 英賀夫 | 山彦の答へも遠く草の中     | 神戸  | 亂花    |
| 大阪  | 柳馬  | 愚鈍さは牛の角にも似て     | 高岡  | 一汚    |
| 滋賀  | 幽光  | 三度喰ひ三度呑んでは日をつなぎ | 釜ヶ池 | 呑吸    |
| 大阪  | 一久  | 日支交戦に會して        |     |       |
| 大和  | 白帝子 | 萬歳が乗車ラツパへ續くなり   | 撫順  | 深太樓   |

治四十四年四月廿四日(六)ナシ(七)御元  
 日坐るころへ坐らされ、秋さらり銀の  
 襖のものおもり、子よ妻よばらばらにな  
 れば浄土なり、以上路郎師の句(八)汗だ  
 くく食はんかために戦ひぬ、西瓜より  
 軽い男の子が生まれ、(九)讀書、音楽、運  
 動、酒、女、バツト、オソラク何んでも  
 好きになれる軽便な男それでゐるカタギ  
 也(十)ナシ(十一)裏切者(十二)大正末年  
 (1911) 三浦秋無草  
 (一)しげあき、(二)秋無草を用ふるを常  
 ますれぎ、呑空子なる別號をも屢々用ふ  
 (三)佐賀縣小城町(四)松山市末廣町二丁  
 目(五)明治三十八年四月二十八日生(六)  
 電柱は都へつゞ懐し(七)水府すき燒さ  
 見ても船頭葱をさけ(路郎)米俵ごなに積  
 んでも景氣よし(五健)其他枚舉するに  
 違あらず(八)行軍を先生までが懐しみ、  
 兄さんにつかす羽根はひつかより、富  
 士山の見える車窓へ答をおき、等、先々  
 無難ならんか(九)本職の横文字愛用を除  
 いては、戯曲、卓球、旅行、集印、野球  
 (一〇)未婚(一一)強慢な男、愛嬌のない  
 女(一二)昭和二年六月



# 川 柳 幽 明 無 線 電 話

秋 農 屋

## (其 六)

○秋 農 屋

▲狂句堂十世川柳

●深翠亭十一世川柳

○貴下は平井君ですか。▲ア、梅本君か、僕は十世川柳です。○私君君は、時々句會で面晤した而已で、特に深く御交際しませんでした。ある時、淺草邊の句會で、某氏が「近來、狂句集を公然出版して、内務省に届け出るに、必ず其製本全部を没收される。此れは句集の中に、末番句を掲載する故だから。今後は社中一同申し合せて、末番句を作らぬ事にしよう」と言ふに、其席に居られた君は、急に手を振つて、「今後、末番句を作らぬと云ふは、實に以ての外だ。他の詩歌連俳等には、末番句の如きものは決して無く、只我が柳風狂句の専有物で、亦、その生命でもあるから、今後は益々獎勵して、多く作らせるが宜い。亦、句集を出版して、其筋に没收される虞れがあらば、出版届をせぬが宜い」と言明された事を、私は善く記憶して居ますが、今日でも其説は改めませんか。▲今も猶昨の如く、僕の説は決して改めない。○君は私よりも、廿六歳の年長者の故か、失敬ながら頭腦が古いやうですね。▲人間が年を取れば、誰でも頭腦が古くなる。君の頭腦も新しいと言へまい。○イヤ君よりも、廿六歳だけは新しからう。▲そんな愚論は罷めにしよう。此處に十一世川柳が来て居るから、僕は御免を蒙らう。○もし君は簽さんかえ。●アア梅本君、十世は何かぶつ／＼言ひながら、向へ行つてしまつたが、君は口論でもしたのかえ。○ナニ暫につまらぬ事から、十世に怒られたのだ、今日は先生少し不機嫌だね。唔近

頃は平素でもあの通りだ、大方アル中、いふ奴だと思ふ。○十世のアル中よりも、君は先年妻女に死別して後、洲崎遊廓の娼藝妓を、自宅に引入れて寵愛し、それが爲めに、腎虚して死んだといふ噂だね。●君は昔よりも、大層口が悪くなつたやうだ。○老人に成つて口が達者になつたのだ、其代りに足腰が弱くなつた。そんな事は姑く置いて、君が冥土へ赴いた後は、十世が再び返り咲して、主判者も成つたが、其頃、十二世の椅子を狙つた者が、一三名顯はれたさうだね。●その噂は冥土までも聞えた。元來、僕が病死した後に、十二世は、社中の推薦に依つて、柳花樓和洲君がなる豫定であつた。それを十世は何も思つたか、十二世川柳の名を、芋大根のやうに賣物に出し、最初にある人を介して、新派の弓野、陳坊君に賣込み、交渉數回の後、金二百圓で、賣買の契約が成立して、儲、いよく取引きといふ間際に、陳坊君はその友人より、「十二世は、既に和洲君と決定して居るので、たゞひ君が、十世より買収するとも、社中一統に承知せぬから、速に破談した方が宜い」と忠告され、大いに驚いて、自身で和洲君を訪問して、一部終始を聴取り、友人の忠告が眞實であつて、十世の欺言に乗つた事を知り、直に小便してしまつた。其次には、これも同じく役者にて、新派の悪念坊といふ人だ。此人は、例の問題となつた、初代川柳の畫像が、羽前の某家に藏せられて居るを聞き、手を廻してそれを買入れて後、「此重寶を所持なすからは、俺が十二世川柳だ」と大見得を切る目算であつたが、畫像が容易に手に入らぬ爲に

大百の鬘を被つたまゝ、舞臺の切穴へ迫込んでしまつた。さてさん尻に控へたは、羽前の……。○其人の名は顯はさぬ方が宜い。●假名ならば差支へ無からう。○イヤ假名でも宜しくない。●それならば、「柳多留研究」や「鯨鯨」に屢々寄稿する人で、君もよく知つて居るはずだ。其人が東京に滞在中、何ぞ思つたか野心を起し、二三の有力者を歴訪して、甚遠廻しに、謀叛の程を仄めかしたが、連判帳に加はる者が無く、遂に野心を抑へて悄悄歸郷したといふ噂だよ。○自分の技倆が充分ならば、他人の名なきを嗣かすとも可いのに、夫等の人々は、何故に川柳の古暖簾を買つて、それで店頭を飾らうとしたのであらう。陳坊悪念坊兩君の如きは、新派から舊派に逆轉して、巢替へをする心算であつたらしいが、其意志は、全く私達には解らない。●にもそれは解らい。前に言つたやうな次第で、十世は聲望を失墮して、社中より隠退させられ、俄かに和洲君が、碧流舎十二世川柳と成つた。それも任期三年といふ約束で、三年が過ぎて潔く勇退したので、それと同時に、柄井亦十三世川柳が出来たのだ。○十二世の立机披露會のちらしに「御最負を頼むひろめの柳橋」といふ、自句を書いて配布したね。●あの當時十二世は、柳橋に住居して居るから、自身が藝妓のつもりで居たのだらう。○柳橋の藝妓ではない、洲崎の娼藝妓に、君が溺惑してゐた頃、君は賣船君に、ある事を依頼したらうね。○そんな事を誰から聴いたえ。○賣船さんから直接に聴いた。●その事まで知られたらば、もう退却退却。○マア待つたゞ。○



# 海士の事追補

蛭 子 生

土佐俚諺

お月様桃色、誰が言ふた、海女が言ふた、海女の口引きさげ

に就ては六月號加納さんのお話、八月號拙稿に關し、私はお約束した通り「土佐句テニハ集」の發行者たる、桐島像一先生に出狀して事の次第を申入れた處、土佐の好事家に尋ねて回答しようこの事だ左の通報を頂いた。

土佐にては「アマ」は通俗的に女漁人か云ひ、男漁人はリヨウシシ申ならはしに候「アマの口を」云々の句は二百

も俗諺は「アマ」ごあるより、之を文字に現はすには、矢張通俗的に漁婦ご聞ゆる様にいたさねば、一般に通じ難し、故に必ずしも婦人を心に想像するにてはなく、文字は婦人的を用る慣したるものご解釋ありて可然存候、文字の當否を論ずるよりも斯く書くごを以て土佐人は不都合ご思はず、又其俗諺の流通數百年を経たりごいふ事實を御承知あれば、其以上は議論に御座候右土佐の其道の者より承はりたる處を御參考に申上候

二艘に三人乗つて網する處が描かれてゐた。又大毎紙上の經濟風土記高知縣之卷にも、俚諺は同じく「海女の口引き裂け」ご記して

幡多郡の南部へ行くご、今でもこんな俚諺が残つて居る。安藝郡室戸岬、幡多郡蹠蹠岬（足摺岬ごもいふ）および沖の島附近が有名な土佐の珊瑚採取場だ。漁夫三人乃至五人が船にのり、夜半の一時頃に出發する。そして夜明の六時頃、深さ五六十尋位の珊瑚礁に到達するご、そこで網に石の重りをつけ網東の漁具を投下して採取を初める。わかり易くいへば、要するに海底の珊

珊瑚を網の目に引つかけてゐるにはほかならない。彼等はかうして一週間位を沖で暮す、そしてその漁期は殆ど一ケ年を通じてであるが、最盛期は三月から九月に至る七ヶ月ばかりだ。何こか統制方法を講じて、珊瑚の繁殖を助けたら、將來必ず昔の聲譽をこり返すことがあります、水産試験場あたりでは着々これが對策を研究してゐる。

さあつて、「漁夫三人乃至五人が船にのり」で、男なる事は判明する。然し二百年前から傳へられた俗語だこせば、恐らく當時は「海人」が「あま」を書き、「海女」こは文字しなかつたであらうこ私は察する。

今出た海士の荒い鼻息（武初）

に對し屑芥日録初へんに

富士を向ふに海士の一息

は面白い對照だ。今新紙の報する處によるこ

波靜かな英虞灣に活躍する志摩のアマの生活をアメリカ、フオックス會社が発聲映話にこり海外へ紹介するこにこなり技師一行が乗りこみこの程來真珠

こるアマの吐息の哀調まで細大もらさすトキーに納めてゐる。

日本山海名産圖會卷の三にも「鰻を取には必ず女海人を以てす……息をこむむるここ暫時、尤朝な夕なに馴たるわざなりこはいへごも、出て息を吹くに、其聲遠くも響き聞えて實に悲し」こある。

序だから「武玉川」に載つてるアマの句を列ぶれば

海士の子の頬を舐れは鹽はゆき  
婆々が昔は指折の海士

髪結ふて淋しくみへる海士の顔

産湯へ鹽を入れる蟹の子

蟹の子のつめれに乳にぶらさがり

今は一分为でがてんせぬ海士

につこ笑つて帯をこく海士

ぶらり病に海士が干して居る

終に加納さんが「間引く」話をされたが

四國九州全体に行はれたこいふよりは、

徳川時代の人に政策であつた事は、各種

文獻に残されてある。

今日土佐へ出籠きして居る濟州島のアマに就て述べたいのであるが後日にしよ

う。珊瑚の種類はボケ、ボケマガヒ、桃色、赤、白に區別され、ボケを最高とする。一匁六圓以上もしよう。臺灣の珊瑚採取の如きも、濫獲のため當事者は將來を憂慮して居る（八月十六日稿）

【添記】九月號の拙稿は「正氣散」の事であつた。その九月號が配達された二日前に、柳雨夫人から殘暑見舞の長い、お手紙を頂いた。丁度私は日本名著全集の柳雨翁校訂「武玉川」をみてゐて、六へんに

前帯で横平らしい正氣散

と、翁が鐘道散でなく正氣散として居らるゝのを發見したのであつた。私には面白い縁だと感じた。

益軒の養生訓にも卷六に、「風邪發散するに、香蘇散、敗毒散、藿香正氣散」卷七には「藿香正氣散、敗毒散は毎服二匁、水一盞、生薑三片、棗一枚、七分に煎す、寒多きは熱服し、熱多きは温服すといへり」とある。不換金正氣散に藿香が盛つてゐるは前稿に記した。

（八月三十日）

x x x x x



# 川柳塔

素・琴・山・緑・合議選

朝田新水

獨唱の隣へもれる薔薇の垣  
女房の知らぬ借金してしまひ  
座蒲團の上によろけた最後です  
置炬燵家内四人の睦しさ  
晴着の柄へ戀をむさほる

松丘町二

太陽は怠け者なり夜業の灯  
貧しければ今朝は左の眼が赤し  
妻椅子にあり足をばたつかせ  
まこも多食の唇なるよ  
目覺むれば枕の下の秋の風

○ 福田山雨樓

蓋のない含嗽藥へ氣が尖り  
壁の蜘蛛おごせばごきつごさせるかな  
月の明りに兒の下駄を拾つて來  
子のゐる香ひ家をせばめる  
車掌さて若さを包む眉の濃き

○ 關本雅幽

パンの匂が身にしむ屋根の月  
箒持てさうかくミエアロンの戀  
トンビ着てをかしや死んだ叔父に似る

○ 橋本綠雨

パンクした事を車掌の驚かず  
ぜいたくを云はすまいさてたまつて居  
お歸りを云ふ表情もふるくさし  
秋風にすゝきも我もさからはす

○ 岩崎柳路

看護婦の氣轉へ感謝する涙  
今向ふへ馬賊の逃けた砂煙  
久々に行けばさりこの飲んで居る  
秋の窓ロイド眼鏡の女居る

◇ 茨木奈緒美

抽斗のがたつく室に一人居る  
だまつて紙幣をバラ／＼こかぞへ  
寝ころべは冬は窓から覗くなり  
五位鷺の一聲闇をさぐりゆく  
おそろへた虫に電燈光るなり  
臨終の窓に枯葉のあたるなり

◇ 岩垣奇可愛

ありまきを老眼鏡の念なごこ  
慾捨てゝ南無阿彌陀佛手を洗ひ  
結婚へ魚眼寫眞を考へる  
愛の毒素人一匹を殺したり

◇ 熊谷紅

嘘ついて見上げる空の雲早し  
秋の夜をスカイサインへ懐手  
町内の草分ご云ふ夜店出し  
心まで疲れて寝込む折靴  
飛行機へ一遍乗つたらかと思ひ  
旅の恥けろりんごして朝を出る

◇ 西村明珠

親しさに嘘云ふ口ごなり切れず  
はつきりご電話を切つてから誹り

門番へ感謝する程老いてるす  
酒飲まぬ父ごせはしく山を下り  
降参をしろご葉巻の煙が来る

◇ 池田雪峰

多忙なる秋ご仔犬のつきまごひ  
取入れの秋を芝居師儲けに来  
秋の空を農夫マリヤの如く見る  
秋の夜を肩がこる程もの思ひ

◇ 中野裸人

お母さんの嘘が二階の子に聞え  
みんな拂へば掛取り帽子忘れかけ  
思案してすへば煙管の金の味  
通天閣の下で女は待つご云ふ

幸福

◇ 久方恭秋

僕の幸福を田舎娘が見てるます  
カナリヤに鳴けうら／＼かな日じやないか  
うつろなる心に三味を強ひられて  
石ころを蹴れば怒つた音を立て  
エスさまよ地獄の床でお寝みよ

◇ 岡崎桂枝

失業も慢性だよご網を梳き

好むなら喰はせミ醫者も手を離し  
須磨なさが良いミ博士は云うたッけ  
其れミなく娘は寫眞撮らされる

◇ 川村 觀月

百姓の胸算用の冬ミなり  
耕着て鎌をミぐ日の若かりき  
朝の霧プロレタリアのものなるぞ  
友達の聲に茶漬の音をさせ  
持つて來たように借家が建つてゆく

◇ 永川 秋月

讀書して居るに御詠歌まだやめず  
電灯の檢査に運のよいこごよ  
野球見に行く段取りが妻に知れ  
前掛けにかくして一合買うてくる

◇ 水谷 鮎美

十二月あかい甚平の子がひこり  
人間にすぎたる酒に小石蹴る  
ぎんなんのさびしく枝は北へのび  
萬引の女の鼻の高かりき  
禿のある事が主任の眼にかなひ

◇ 喜多 春秋

笑はせば笑つたあごの暗い顔  
洗はずに体操をする晝の風呂  
汽車の窓トロツコの路草に消え  
石炭の山が光つて秋であり

◇ 吉田 水車

名月の下にひれ伏す大都會

百貨店風景

似合ふかミ問はれて困るネクタイ部  
一等が出るミ福引鈴をふり  
事務所でも邪魔にならないリーグ戦

◇ 日野 華水

天は高しロポットの世界よ  
雑音の中で靜かな瓦斯タンク  
第三種郵便大きな音をさせ  
看護婦の聲が途切れて時計鳴り

◇ 山本 丹路

秋の陽へまだ職のない手が冷える  
賽銭のおちつく音が生々し  
拳握りしめしはポケットの中なりき  
人形ミなる白粉ののびがよし

◇ 西田 艸樂

皆んなが去つてから痛いまごを撫で  
弦月の冬近うして屋臺店  
傷を抱いて牝鶏の如くなりぬ

◇ 中見 光治

鬱憤を枕がいつか吸つてくれ  
驚かぬ人まもなつて白髪殖ゆ  
鼠 騒ぐな 俺も 減 俸  
なりふりを構はぬ黄楊の櫛さなり

◇ 妹尾 變人

松植えて恩師は遠いまごへゆく  
砂埃馬がやたらにたゞかれる

◇ 中澤 濁水

それくに子は久濶を驚かせ  
言ひ譯は妻の尖りを手で押え  
後添への指輪を訊けばたゞ笑ひ

◇ 木村 晃卓

懸引の中へ藝者が舞妓が來  
僕まごが困る丈けさま貸してやり

◇ 伊藤 緑之助

ポスターの女愛人の肩に似て  
長話癖の一つま知つてゐて

### 粒々集

御影 長崎 柳秀

お互に口をつゝしむ旅戻り  
死ぬまごに決れば女いさぎよし  
落ついて來た借財は萬を越し  
刺銭を出す車掌靴の底を搔き

東京 富士野鞍馬

三菱を龍車にたまへあきらめる  
花道で鴈次郎の脛細く見る  
その柄は八重子であつてよくうつり  
叱られてゐる合の手に時計鳴る

松山 前田 五健

笑はして置けよお金のある人さ  
闘ひの美へ水を打つ武徳殿  
好色にされて笑つた顔の艶  
寒釣の鴨に親しむ氣が起り



# 作句練習と題詠に就て

—(初期時代の作家へ)—

松 盛 琴 人

「川柳を作るには種々の方面から研究しなければならぬ。古句の研究などは勿論だが先づ作句練習といふ事は何人にも等閑にすることは出来ない。就中題詠は初心者と云はず相當に出来る人達にも、或は先輩にも、吟社に句會のある以上は之を度外する事は今の處出来ぬであらふ。それは俳句界にでも未だにそうであるから、殊に川柳はこれからもつと發展しなければならぬ使命を持つて居るから、尙更題詠を廢してしまふことは出来ない。又作句に題を課すのは雑吟より初心者の方が交つて居るので、川柳家を養成する上にも題を提出するもので、併し何事によらず一利一害は伴ふもので、題詠の爲めに題詠者に終始して了ふ様な場合が無い。故に川柳に熟練した先輩の内には句會無用、題詠無用、近頃は選者無用論などを主張してゐる方も在る様だが、若し夫等の人達の言ふ如くす

れば、初心者は一切何處へ行くであらふか。練習道場を持たぬ初心者には、練習不足より来る進境の弛緩は徒らに其方向に迷ふのみではあるまい。丁度捨育ちの無教育者が善悪の見境ひも無く野育ちに或は、無軟の徒と成り下る様になるだらう、されば社會には義務教育から中學大學専門學校などがあつて、人類の向上進歩を圖る。それは川柳界に吟社があり、句會があつて初心者を指導するので、其處に選者の存在する理由でもある。そうした意味から云へば題詠も句會も選者も必要であらふ。飛彈内匠左甚五郎も鼻たれ小僧の内から名人でなかつた様に、何事にも練習とよき師は必要であらふ。併し無用論者はその濫立や誤つた功利的指導精神やに依る悪幣の助長を嫌惡する處から之を排撃するのであらふから、先づ夫れはそれとして、初心者に兎に角作句練習を怠つてはならないと考へた所から聊か相互研究の意味で、表題の如き

ものを書き始めた譯である。其處で此作句練習に付て直ぐ考へさせられる事は、作句初期の人達が精根を盡して作つた川柳が、楽しんで甲斐もなく無慘流産の如き全没！から来る苦痛である。此奴が一番初心者を苦しめる奴で、此陣痛は少しでも軽くそして完全な川柳を生ませたい。併しこれが中々至難の業で餘程の名産婆でないといふ安産は不可能だ。此辛い陣痛の期間を通過せぬ内に多くは、兜を脱いで闇から闇へ消失せる。川柳家も澤山あるが熱心に此辛い期間を突破し句作を續けて行く我慢強い人だけには、何時か一二句宛つ自分の句が紙上に散見する様になる。之は單に「熱心に怠らず努力したからだ」と云へばそれ迄だが、サテ其當事者には幾分其「コツ」が得心出来るも、他の流産組には薩張り得心が出来なない。其得心の行かぬ處を得心行く様になければ闇から闇に消える。流産兒が殖えるばかりだ。それ等を救ひたい目的も

含んでゐるので其點から云へば、成べく餘計な文句を抜きにして、率直に題詠に對する要點に觸れて行く方が早手廻しだと思ふので先づ句會で練習する題詠の事から始める。

初めて句會に出席した初心者、ズラリと並んだ先輩川柳家の偉容を見ると、譯も無くポーツと逆上せて終ふものだ。それが回を重ねる毎に場馴れては来るが、サテ中々馴れぬのは作句である。二回や三回全没の連続は敢て誰でも珍らしくない事である。それは何故であらふ？、席上には四五尺の丈の巻紙へ達筆に相談とか戀、笑ひ聲、奇術、久し振り、等々と十題近くも張り出されて皆締切時間が記されてゐる、之を眺めただけでも初期作句家は少々場馴れた位では、餅が喉佛に突へた様に、目を白黒せねばならない。併し此時句會が是が非でも皆作句せよと命令して居るのでない事を知れば、稍や落着く苦、又ズラリと並んで先輩作家が、居たからとて怖れる必要はない、若しそれが悪魔の様であり、喰ひ付きさうな娘と云はれる人間が居たとて、何も心配しないであらう。反つて其人達は汝の真き友であるばかりか、皆慈父の様に親切な人達ばかりなのである。之は何人でも一度は初心時代に當面する事實なのである初心者、斯ふした事實を知らず、句會に出席するから、自分の幻に襲はれる。其爲自然幻想も停滯して終ふ。故に作句初期時代の人は

題は自分の知つたものだけ作句し、知らざるものを無理に作らぬ様、又時間があつて作句したければ其不案内の課題を他の先輩者に尋ねるか又は其人の作句が披露される時注意して聞いて居れば、其作句の骨なり、題其もの、取扱ひ方が能く得心出来るものである。今私は自分の過去現在に経験したものを作句すればよいと云つたが、其作句方法を言はれば不明だから一寸した例を擧げて見る大体に於て初期の内は、出題されたものが自分に経験若しくは其内容を知つてゐるか否かを、先づ過去に於て探し求める。幸に体験した事柄であれば其當時の事象なり事件を想起し、其時受けた實感を捉え來りて句案すれば句は出来るといふので、例へば「以前に戀人から手紙が繁々來たとする、其手紙には彼女が寢た時間まで必ず書いてあつたと」思ひ出す。斯ふした過去に屬する事でも其處に感激が有つたればこそ、深く忘れる事なく印象されて残つてゐるのである。其處で之を川柳といふ十七字にまとめて見る。

戀人は寢た時間まで書いて来る

これだ一句纏つた譯である。此様な方法でゆつたりして句氣持と、自由の境地に浸つて作句すれば川柳は初期作句時代でも、樂々出来るのである。如斯作句態度、又は作句の方法を知るといふ事は初心時代には相當役に立つものだが、初めはそれを知らないゆへに、平

常人は出付けめ場所へ出ると臆病になる様に、初心者、初めて句會へ出ると直ぐ氣を呑まれて終ふ。それでは句が出来難い上にも出来なくなる、だからと普通の禮儀も無視して、人を驚愕せしめる如き非常識の行動せよと云ふのではない。お互が常識の上で心持を寛げる程度で打解けるのがよいと思ふ。そして自分に不明の點なぞあれば、當夜の幹事なり傍らの人に遠慮なく尋ねる方がよいので川柳人は前にも述べた様に、親切であるから知つてゐる事は直ぐ教へて呉れる。否教へるなどいふ態度は微塵もない、話して呉れるそれと同時に親しみを増して、即座に真き友となり得る幸福がある。其を知らずして妙に自から遠慮して固くなる時は、元來川柳人は敏感だから、其石の様な固さがすぐ感じられて、其邊が妙に冷やかに、石の地藏尊者が並んでる様に硬化する。それで和やかな氣分が失はれ誠に詰らぬそつけない氣持、お互が味はれなければならない。それが自他の作句氣分まで破壊し、出来得べき句想も臍の奥に引込んで仕舞ふ。其では大變な損だ。故にせう／＼氣輕に打解けるのが肝要……然もさうする事に依て初期時代の作句家は忽ち「句が出来て／＼困る」といふ時代が来る。この「句が出来て／＼困る」は、ご出来る時代に飛んでこれから少々注意したい事がある。之を分り易く述べるには其時代の句材なるものを檢

討して行く方が早道らしいから前の「戀」とい題に因んで例を擧げてみやう。

戀と神頼み、相合傘、戀の辻占、お百度、四疊半、ラブレター、待つ、逢ふ、合性、口笛、戀病ひ、戀寫眞、惚れ初め、戀風、手を握る、深くなる、片思ひ、添ふ、口説、羞かしい、目で知らず、人前へ、人目を忍ぶ、等々々

これ等の句材は殆んど誰れにも直ぐ氣付く範圍のもので斯ふした普通ありふれた句材を捉えて作句するならば、少しく川柳の出来る人なら、セコンドと競争出来るほど容易に作句する事が出来る。故に「句が出来て々々困る」といふ時代が有るに違ひない。併し其時代の句を後で味ふて見た時には尠からず失望するであらう。何故かと云へば同じ句材でも今少し深く思索をめぐらして、作句しなかつたといふ失望、これを見ても皮想の句ばかりで深みといふものがない。何人でも左様に感じる事が有つたであらう。其経験のない人は非常な天才家なのであらう。處でその利害と原因を探れてみやう。

セコンドと競争出来る程容易に作句されるもの、即ち其容易く出来るといふ、其容易さは他人にも容易いものである。そうした句は何句出来た處で平凡以上には出ない練習にはよいが、名句を求める法でない。然も同じレベルの人が多ければ多い程其句は同

想類句としてはねられる。同想類句は賞が上等でないといふ點に一致する。殊に初期作句時代は尙更平凡は免れない。故に若し其處へ氣付いて来なければ如何に句達者であつても、真に優れたものは生めない。それを知らずに句が出来て々々困る」などを考へてみると大變な間違ひとなる。自分の句が前抜やお情けで選されてゐる事に、若しくは誌面を賑はすジヤナリズムに五六句宛使用されてゐる様なものに、字頂天になる事は初期時代の禁物と氣付かなければならぬ。以上の意味を約言すれば、「句が出来て々々困る」ほど出来る内に、其中から一句でも二句でも磨きをかけてる様に心掛けなければ、特等品は生れて来ぬといふ事である。

これを句材其物の點からいふなら、前に擧げた様な誰にでも直ぐ氣付く句材は、皮相的であり且つ平凡であるは勿論だが、それは既に先人が充分に觀察し思索し作句して、世に送り出してゐるところのものである。故に初心者の目にも新らしく見ゆるので、事實は決して新しい境地ではない。されば以上の如き容易に發見される處の句材は、全部古き句材で、云はゞ使用に耐へぬ古木同然なのである。其様な古木の建築は少しの地震に耐へられぬものゆへ、さうした無駄な努力は極く初心の内だけに止め、それから深く、自己の思想を掘り下げる事に、全力を盡さなく

ては後代に残る様で佳句は得られぬと思ふ例へば前記の句材が、最早古きものだとすれば更に戀に對する新たなる感激！それを句材としなければならぬ。

(一)是迄の句材が客觀的皮相に止まると思ふなら之を主觀的に深く凝視する事。

(二)觀察眼を鋭くして内部的に、新らしきものを生命的に發見する事に努める事。

然も現代の背景に於ける フレッシュユナ感覺を逞ふして之を川柳作句資料とし、完全に表現すべきであらうと思ふ。之が所謂句に磨きをかけてる一手段なのであるが、作句も此處まで進むと今度は「句が出来なくて困る」様になる。何故作句がさう難かしくなるのかと云ふ因を探すと、客觀的より主觀的に句境を深めて行く所に有る。客觀句は比較的樂に作句が出来るが、主觀句となると、眞實の自己を詠はんとする境地が、重きをなすがゆへ自然に難かしくなる。従て句は深刻さを増すのである。其處を熱心に突破すれば「月並句」や「そうですか川柳」の如き凡句は絶滅されて、皆一句一句相當價值ある川柳が作句される様に進歩する。

嘗て路那先生が「戀さまさま」と題して「昔の句と今の句」を列擧して本誌第一卷第八號に説かれてゐるところのものは、非常に参考になるもので、我々川柳家は是非一讀しておいて貰ひたい。今其内から對照句を二三拜借

して見る。尙詳しくは本誌に就て味讀して頂きたい。

握られた片手疊をむしつてゐる 古句  
抱いた子に叩かゞ見る惚れた人 古句  
びんづるの撫でごころも戀の願 古句  
母が来てかくす手紙の長すぎる 一聲  
振向けば君も小さい並木路 路 葎 乃  
思はじとするには金がありまじり 路 葎 乃  
以上ほんの二三句を對照した丈けだが、其片鱗は窺はれると思ふ。古句といふてもこれは非常に良いものであるに不拘、時代といふ變化は近代句に比して深味が淺い。且つ古めかしい感じがする。現代を一考へて見れば疊をむしつたり、肩を叩かせたり、おびんづる様へ訴へたり、そんな廻りくごい戀はして居ない。振袖姿の小笠原流で運ぶ薄茶の味も感じも、よいものであるが、それは種種階級のものであり、時代に近く左様ならする人達に取つてのみ現在の川柳界で云へば、嬉しいものであらう、現代の背景は一般にそれは許されぬ。社會を眺めれば世をあげて貧富の二潮流はハツキリと分離しやうとしてゐるそれが善いか悪いかは知らぬが、時代の變遷はそれほど迄に相達して來てゐる。思想の變化は當然なのである。其現滅悲哀は氣の毒ではあるが、どうにもならぬ。古いものは今の若人達に、否これからの人達には捨て去られる外仕様がな。若し今の人達が古いものに執着してゐれば當然時代の落伍者同様、川柳

界からも置去りにされる。

因に同時代の句及最近の句を少し並べて参考にしやう、初期川柳作家は古川柳を研究すると共にそこに關心を持つて自己を養成しなければならぬと思ふ。

過去七八年以前の戀句

心臓の弱い身體で戀をする 紋太  
立話男は電柱にもたれ 青明  
又逢へば同じ毛糸を編んでゐる 水府  
泣き明し度いと別れるとき思ひ 維想樓  
君が緋は消えてノートに淋し名 句浪人  
嬉曳に過ぎる 十分十五分 煙之助  
以上はほゞ路那先生の擧げた句と同時代のものであるが、句境は葎乃女史及路那先生の句が斷然トツプを切つてゐるかの感がある。決して之は我田引水ではない。

最近の句

戀をしてゐるのよといひたい眼 路那  
泣けてくるほどに戀しき君もす 路那  
藻の花はあまき二人の頃のまゝ 葎乃  
戀の罎あゝの眼だらうか眼だらう 路那  
かつて戀知らずと言ひし妻いと 亂就  
遭難に戀といふ字は忘れてた 新水  
口あいて惚れてゐるのがまじり 愚陀  
汽車はまじりた寄るに戀に夕月の 山雨樓  
戀のひま臥てゐて雨の美しくさ 鮎美  
感激の女は乳へ息を溜め 素人

憂鬱の日もあつてよし許婚 二期南  
初期作句家には大分句が、高踏的になつた様だから、筆を改めてお次は「笑ひ聲」といふ匯によつて、句材の平凡とそれの取扱ひ方が粗雑なる爲め氣の毒にも没句の運命を背負はされた同情すべき、闇から闇への流産句を三途の川あたりから呼び戻して一々檢討して見る事にする。

(1) 報告川柳、ソーテスカ川柳と見られる句  
笑ひ聲止んで坊やは寝てしまひ  
笑聲が彼方此方である宴會場  
満員のバスで起つた笑ひ聲

(2) 取扱が粗雑なる爲め、句語が取つて付けた様に唐突で急拵へといふものになつたそれは單的にお可笑味とか、面白味とかだけを捉えんとして失敗した作なのである  
三句目不明。  
笑ひ聲相變らずの「お互ひで」  
笑ひ聲やんだところで「今日は」  
交番へ来たらしい笑ひ聲  
御馳走が出て親友の笑ひ聲  
彼女が來てから笑ひはじめ

(3) 御馳走の句などは、食はせれば笑はぬ男らしいが、彼女が來てから笑ふ人と、同一對の現金さで川柳價值としては零だ。次の給料日の句も兄弟分らしい。  
給料日歸れば妻の笑聲  
思明けの日を朗らかな笑ひ聲

(4) 給料日に給料を貰つて新妻の待つ我家へ戻ると門口で妻の若々しい笑ひ聲がきこへたといふ處のつもりならであらふが、取扱粗雑の爲め反對の結果を生んだ。忌明けも朗らかが傷である。共に表現ふ足だ。次の二句は文字を弄して脅かしたり女の態度を描寫したわけのものゆへ矢張り闇へ葬られた不幸兒だ。

狂笑めらめら呪詛の眞が燃えて  
袖口へ笑聲包む令夫人

(5) 次はエロ味を取扱つて醜態曝露此分で進むと昭和未摘花がきつと出来やうといふもの

笑聲やんで愛の巢の電燈消へ  
お隣へ聞えますよと笑ひ聲  
猥談に一人の女笑ひこけ

(6) うしろに笑ひ聲を聞いた處の句材これは皆すぐ氣付くもの従つて同想異曲の類句となる。實にこれ等は作句甲斐のないといふもので八句目などはかなり巧みに詠つてゐるが矢張り闇へ葬られて終つた。此邊の骨を注意すべきだらふ。

笑聲を谷に感じて出るカフェエ  
カフェエを素通に聞く笑ひ聲  
笑聲へフト女ふり返へり

笑聲を後に篠突く雨を  
誘惑に勝ち笑聲を聞きながら  
笑ひ聲背に感じて會ひに行き  
笑聲を女後ろへ聞いて降り  
足音のあらひ背中へ笑ひ聲

(7) 全部はとゞつてゐるが、客観描寫で上じりして内容に深味がないゆへに前同斷  
笑聲になつて末座は足を組み  
秋祭り姉も來てゐる笑ひ聲  
當選の家に笑聲のほがらかさ  
弟の屈託もない笑ひ聲  
笑聲はづんでせはしいだんじり

(8) 主観句として前の客観句よりは深味があつても、但し今一步といふ處で落選させられたのは惜しいと云ふ程の句で、前抜位には入る可き可能性があるもの  
笑ひ聲心に寒い風が吹き  
笑ひ聲秋の夜長を圓うさせ  
笑聲ばかりを聞いて裏切られ  
失業に隣の笑ひ明るすぎ  
笑聲女の耳へ空虚なり  
病人が淋しがつてる笑ひ聲

(9) 以上は皆没となつたもの、但し作句練習場の句へ粗製濫造の傾きもあるが、斯ふして並べて検討すれば何分かは初期作句

家の参考ともならう。以下は選出された句を二三評して筆を闕く事にする。他に抜かれた句は本誌十二月號に發表されてゐるから、各人に於て自から比較研究して見る事も無駄ではなからふ。

笑ひ聲あつさり五圓紙幣を出し 明暗子  
其處に其人の氣分が浮き出てゐる  
平温が續いた今朝の笑ひ聲 陽喜亭  
平温は体温器の事である 老練と云ひた

笑聲國から母のくる話 柳仙  
家庭的圓滿さが和やかに出てゐる  
興奮へ笑聲だけが耳へ入り 夢裡

たしかにさうである 光景躍如  
抜け路地の巾が氣になる笑ひ聲 白柳子  
親しい友と話し／＼狭い路地を歩いて  
ゐる處がよく出てゐる

以上が私の目に留つたものだが、素的に優れた句であると云ひ難い。初心者は始めて此範圍から脱出して、路郎先生にも劣らぬ位の優れた句を生み出して頂きたい。それが現在の川柳をよりよく向上發展せしむる素因でもある。故に私は初期作句家諸君の一大奮起を望んで居る次第であります。

# 光耀抄

## 葎乃選

大阪 壽枝女

子も親も分らぬ程に雀肥え  
編物の膝の上なるあたゝかさ  
カナリヤを晝友にして編んで  
蓋をつみ覗けば金魚生きてゐる  
班子猫を置去りにして越して  
あすあたり雨こなるらし埃舞ふ  
風船の心つく兒の手にあまり

大阪 武子

秋晴のガラスへ心くもるなり  
マネキンの手に引かれてる晝御飯  
ぜひもない事よ娘につがせてる  
さうです／＼もう冬ですね  
新線が出来てふみ切り首になり

魚崎町 吟 女

お味見をしてる三子供見のがさず

洗濯屋カフエーの話して歸り  
持つて行けばおこなりさまも茸の飯  
扉の下通る足足足の面白し  
追究に行く口紅を赤うぬり

大阪 雅子

豫期した如く夫はずしを買つて来る  
へら臺へ猫かきたない足で来る  
酒のみをよけて子供風呂へ行き  
お母さんも手傳つて居る紙細工  
マネキンを見に母親を連れて行き

神戸 茂もよ

鹽昆布たくきて指に豆が出来  
小説を讀んでつまされそうになり  
俄雨ふさん入れるに子三二人  
誓文にあれもこれもご思ふだけ  
せな撫せてもらふ女の子がほしく

登ヶ池 紅 篇

お別れの手は痛いまで握りしめ  
死んだ子にそっくりですこ走り出る  
筋道のためぬ夢だが君が居た

大阪 機見女

雨にくる足へ冷たさはひ上り  
食ふ事を夢にまで見る浅ましさ

撫順 松代

洋髪に結はして見ても女人なり  
釜の下夫に頼む用が出来

登ヶ池 伊勢子

口論をするでなかつた病人だ  
あきらめた心へ母を悲しませ

◇ 麻生 葎乃

ダンスホールも踏ます踵の高い靴  
マスターを非難仕合うて女給下り  
カロリーを無視して鉢に皿に凝り  
デパートを出たら灯もつき雨も降り  
赤いポスト君のハートに似て立てる  
時雨れたら松の木もある庭雀  
大阪を見ず赤かぶら桶へ入る



# 一路集

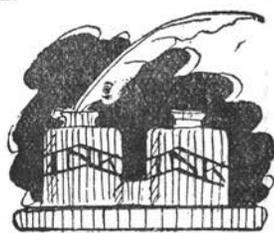
(募集句)

## 疑問

森 東 魚 選

懸命な疑問をくさいものにされ 摩耶火  
 疑問なき持たぬ男でよく 肥り 水人  
 病欠を疑問にされた秋日和 憲坊  
 段違ひ疑問の柱が成つて来る 紅  
 災難がつゞく家相をみて貰ひ 佐保蘭  
 變人の死にふさはしいなぞあり 欸乃  
 買物に百圓紙幣見直され 一笑  
 一卷の終り疑問のまゝですみ 明珠  
 八卦見の家を半信半疑で出 無鬼  
 戀すれば弱し君を疑ふよ 香緒樓  
 まだ解けぬ疑問へ壁は迫るなり 沐天  
 發奮を疑問視されて故里立ち 日日城  
 疑問にもよりけりだよこりの母 ひさし  
 下駄を揃へて疑問まださけす 裸人  
 結局は金さ女の死にされし 湖山

ちんまり三座り直して腑に落<sup>チ</sup>  
 解けきれぬ疑問へ猫かざれに<sup>ニ</sup> 耕民  
 まだ解けぬ謎へ時計がまた響き 洋々  
 疑問なほごけすナイフのぎ<sup>ラ</sup>く<sup>キ</sup> 菊路  
 疑ひそのものゝやうに蛛蛛<sup>下</sup> 勝二  
 疑問から紙一重なる夫婦なり 明晴  
 ふこ疑問さけて涼しい風があり 英賀夫  
 後添ひこ知ろ疑問の眼をそ<sup>ム</sup>ぎ スエノ  
 監査役疑問の解けた判を押し 琴風  
 逢ふ時間過ぎて暗きへうな<sup>タ</sup>る 慈雨來  
 常にない招待券を不氣味がり 蘭山  
 うますぎる話不安の腕を組み 鴉天  
 速答が出来ぬ疑問を子に出され 機見女  
 先生は調らべて置くの逃<sup>ケ</sup>を打ち 艸樂  
 金策のさう陳じても疑はれ 荷千



### 町之西 MEMO 雨 緑

▼久方暮秋君は松江支部の復活に 盡力され十一月三日松江の 重鎮大瀧華雪君を迎えて盛大なる創立句會を催されました。今後本社客員米村あん馬、大瀧華雪、多久和喋朗の諸君の後援で 大いに活躍されることになりました。

▼上野錦水君は 北陸川柳聯盟のため第一着に聖城川柳社を十一月十二日に 訪問されて茶撫朗、吉詳、溪鶯、醉羊の諸君と膝をまじへて隔意なき意見を交換されたそうです、引續き石川縣下の水島から 富保の地方の川柳家を訪れて漸次本社のため 御盡力されることになつてゐます。尙同君近く上阪されて本社へ訪問されることになつてゐます。

▼妹尾變人君の宅では 十一月七日二女儲けられました。お喜び申します。

▼石曾根民郎君(松本市) 縣下須坂町の高峰柳兒君を訪問して一夜道樂、多佳夫、金坊、桃枝の諸君と本誌を話題の中心に親しく話されたそうです。

捨石の疑問手抜きにして弱り 没食子  
 院長に手術の結果そつこ聞き 禾山  
 犯罪の疑問はさけて女あり 幽光  
 校長の馘首疑問疑問に包まれる 同  
 疑ひの晴れて夜明の霜を踏む いわを  
 疑へば時計の振りまで悲し 同  
 待たされて若しと思ふ氣の弱さ 利生  
 疑へばやつぱり變なこゝがあり 同

佳句

行末は疑問官吏の端にゐる 没食子  
 煙草の輪ふつこ昨日へある疑問 勝二  
 占へば生きてゐるこも云ふて 桂枝  
 あんまりなポーナス妻に疑はれ 苦茶坊  
 兒の疑問段々行きづまり 三碧  
 善人のいつか疑問に突き當り 今雨

軸吟

屏風

大島濤明選

出句者百二十三名、集句六百二十四句、  
 の盛大さは正に川柳雜誌の賑やかさを證明  
 してゐると思ふと、遂に悦ばしい極みである  
 私は屏風の題に對して投句者の着想を分類

してみた、そこに種々な變更があり、意想外  
 のものがある、これは初心者に取りても練想  
 上の大に参考になると思ふ。只遺憾に堪えな  
 いりとは全没者を出したことである、一句な  
 りともと思ひ何回も見たのであつたが、遂に  
 約五十名の方々の貴重な努力を葬つたこと  
 はお氣の毒である。

金屏風

集句のうちでは金屏風を材料にした句が  
 最も多く約三十句ばかりあつた、その中から  
 活花へ照り映えてゐる金屏風 無鬼  
 米の植のいゝ時買つた金屏風 鴉天  
 金屏風按摩の過去を聞いてゐる 民郎  
 金屏風は百燭光をてり反へし 水車  
 野心家の眼を威壓する金屏風 奈緒美  
 下張はさうあらうこも金屏風 英賀夫  
 金屏風貫ひ手のある琴をひき 蘭山  
 金屏風伏魔殿は見えぬなり 沐天  
 盛花がバックで生きた金屏風 青兒  
 金屏風ありし昔を光つてる 獨眼子  
 かんざしの色と同じ金屏風 喜由  
 金屏風後ろに暗い炭を持ち(秀) しこし  
 階級の意識を増る金屏風(佳)十三絃堂  
 賣られても矢張り屏風の光り 佐保菓

▼平井蒼太君は病氣で勤務先を退職されて  
 滋賀縣甲賀郡寺庄村寺庄へ轉居されました。  
 尙同君は「スマート」と云ふ美容雜誌の柳壇  
 の選をされもるになりました。二月號發表  
 人形「五句三才景賞十二月廿一日」切同君宛  
 大いに投句をお奨めいたしました。  
 ▼生田翠夢君は十一月三日香落溪から「屏風  
 若紅葉の下に覗いてゐる」の句をよせられた。  
 ▼塗青柳壇で活躍してゐられた「社友熊谷紅  
 君幹事の下に本社塗青支部を新設しました。  
 大いに發展を望みます。

▼楊井二南君は十月十七日ナシヨナルシチ  
 ▲銀行の秋季大ビッグニックで奥田柳甫君と  
 木津川ライン下り笠置新温泉に遊ばれ句に  
 「先着は既に仲居の世辭を聞き」二南「瓦投  
 げいつちしまひによるけたり」柳甫

▼西村明珠君十一月十六日寒霞溪から「絶景  
 に子供のみやげ忘れかけ」の句をよせらる。

▼竹内機見女さんは高知生れなので、来年の  
 ▼お正月に歸郷されて本社支部幹事中澤濁  
 水君にお目にかゝることを楽しんでゐるとの  
 事は社へ知らせて來られました。お合ひの節  
 は例會の事や同人、社友の消息を話されて本  
 社との聯絡をとられることとせう。

▼高崎柳兒君は十月十六日信州野澤温泉に  
 遊ばれ「筆不精湯の香へ矢張り渉らず」の句  
 をよせられました。

▼大山露斗君は廣島へ歸へられて句作に遠  
 ざかれてゐられました、が又大いに投句する  
 とのことです。

▼戸倉普天君から「しばらく投句を忘つてゐ

屏風と婚儀

おめでたと屏風とを結び合せた句に  
高砂の聲が屏風につき當り 没食子  
金屏風處女と別れの灯が映ゆる 同  
再婚のまばゆく座る金屏風(佳) 錦石  
謠曲の目出度さ屏風映へてるる 葉光  
金屏へ調度こりくつんで春湧 三  
悲しみの屏風よ姉を見送りて スエノ

出産と屏風

二枚折の向ふで揚けた狐々の聲 詩郎  
屏風の外で父こなつてる 奇可愛  
屏風から一さ聲父と仕舞(佳) 三碧  
今親になつた屏風の内外 苦茶坊  
初聲を屏風の外で聞いた朝 秋月  
父への句は多いが母への句は殆どない、直  
接である母より間接である父が川柳家に扱  
ひよいと見える。

屏風と病氣

思ひ出の屏風に今は病んでゐる 變人  
み佛を信じ屏風へ病み續み(佳) かずま  
屏風の影に暗い一生(佳) 無人  
聴診器屏風の端に見る隠れ 明晴  
零落れて二枚屏風の影で病み 八歩

針仕事屏風の内は父が病み方眠  
藥湯が煮えて屏風に咳があり 柳仙

貧乏と屏風

枕屏風の寝息に更ける手内職 勝二  
見苦しい世帯をかくす二枚折 耕民  
競買の悲運屏風に陽があたり 棹二  
傾いた家運に屏風忘れられ 洋々  
残された屏風に祖先の影を見る 金太  
貧乏が屏風の奥に隠れてる(佳) 利生  
張りませの屏風に庭の萩が散る 眠舎  
醜態を屏風包んで立つてる 多郎  
屏風越し母のか細い腕を見る(佳) 大一  
病氣や貧乏を材料とした句は哀れであると  
共に深刻である。

屏風の書畫

浮世繪の枕屏風と共に老い(佳) 機見女  
死んだ兒の手跡屏風に燻つて 有爲郎  
待つ間屏風眺めて盲評 鯉友  
背の屏風論旨愈々 冴えた影 荷千  
屏風の詩成程固く座らされ 摩耶火  
金屏風西洋の畫に親しめず 紫白  
仕切りの屏風  
狭い家屏風で仕切る部屋が出来 木公

ましたが、これから句作精進するとの通知が  
ありました。

▼清水虚白、今村吉朗兩君十一月二日香落溪  
を探勝されました。

▼蛭子省二君病氣が近年にない、重休で十月  
同二日から六日までが、絶頂で、家族や醫師の  
情で命だけはとりとめたが、久振りて便りを  
うけました。一日も早く御恢復をお待ちしま  
す。

▼上野錦水君の令妹で、い子さんが十一月一  
日に永眠されました。哀悼の意を表します。

▼番傘北馬會の主催で、第一回川柳趣味餘技  
展を十一月十日から十五日まで、心齋橋の丹  
平ハウスの樓上で催されました。

▼撫順川柳社で十月十七日、本社の同人柳路  
君と誌友深太朗君の歓迎會を催されました。

▼龜谷溪鶴君(石川縣)から上野錦水君を迎  
ひて寄せ書を寄せられました。署名の方々は一  
度及び二三度合つた方ばかりで、特になつ  
かしく感じました。

▼醍醐川柳社から寄せ書をいただきました。

▼十一月號の發行はいつもより三四日遅れ  
たので雑誌の出来上る日の廿一日、晝社友の  
鶴峰君と二人で道頓堀の角座新聲劇觀劇中  
藤本兄弟印刷所から製本が出来たと電話に  
觀劇を中止し全部同夜發送を終つた。延刊の  
ため事務所まで雑誌を取りに來られた。方は  
洋々君、電話で問合せでは御池支部、明文堂  
裸人、葉書では憲之助(大阪)元馬(高知)、英賀  
夫(愛媛)其他賣捌所の二盛社から二回も印

小屏風で仕切れはまが嫁の部屋(佳) 明

性慾を屏風に仕切る宮川町 宙芥  
受附は六枚屏風が壁になり

### 貸借關係

金策は屏風をほめた丈けの損 一枝  
金屏風斷りきれぬ借り手來る(佳) 白柳子  
親類の慾を屏風に聞き流し(秀) 新水  
借金と別に屏風の光りやう 菊路  
借金があるまは見えぬ金屏風 吐句坊

### 子供と屏風

小屏風の端へ子の顔ちらみ見せ 吐句坊  
夢の國枕屏風にかこはれて(佳) 欸乃  
獄門のやうに屏風へ顔が出る 暢山  
隠れん坊屏風へ覗く子を恐れ 里魚  
劍刺さなれば屏風が先づ 倒れ 壽惠兒  
子供の句は深さはないが滑稽で罪がない。

### 屏風を主体としたもの

曲折があつて屏風は立つてゐる 凌冬  
屏風から射す日曜の陽に慌て 桂枝  
枕屏風逆さに立て、吐られる 憲坊  
悲惨事をまた 屏風を蜘蛛が這ひ(佳) 泉流  
國寶の屏風 古來の埃吸ひ 一笑

### 屏風を對照としたもの

諦めた嫉妬屏風へ寝つかれず 紅  
鐘の音語經の聲に屏風 老い 素月  
灯影ふみ屏風の蔭の人に 搖れ 白帝子  
節句雛屏風へ一人こけてゐる 一正  
試演會屏風の蔭で母案じ 荷千  
玄關へ這入れば屏風が威脅する かづを  
屏風見上げし蟻の當惑(佳) 比呂詩  
屏風と遊里

伊達卷の屏風へ派手き音を立て(佳) 艸樂  
お銚子は屏風の端にかしこまり 白花子  
臨檢に枕屏風は哀れなり 沙門  
屏風の陰に震へてゐる 雛妓 同  
屏風だけその夜のこゝを知つて 三代吉  
屏風今胸を踊らすものを見る 湖山  
獸心を知りつくしてゐる屏風(佳) 夜王  
屏風でない屏風

屏風岩こたまの中に見上げられ 明珠  
抱いた兒へ埃をよける袖屏風 琴風  
屏風でない屏風を扱つた句は、この澤山な  
中からやつと二句を得たのみであつた。しか  
し作句はこゝまで想を巡らさなければならぬ、  
それが即ち上達方法の一つである。

刷所へ催促に行かれるなど、途中出合つた愛  
讀者だけでも數十名もあつて、本誌の發行が  
如何にまたれてゐるかが判つて、實に力強  
くを感じました。また編輯部や校正係を擔當す  
る私達の鞭撻にもなりません。  
▽本誌の編輯は路郎先生、琴人、山雨樓、町  
二、愚陀、默思の諸君と私とで致しました。

### 正誤

三五頁川柳塔  
残り蚊のきつさを許す氣にもなり、二南  
二十五頁春秋點  
借りた家何でも彼でも直させる 荷千  
目次  
近作柳樽 松丘町二選あるは安井ひろし選

### 新誌友

(六年十一月十四日まで)  
「川柳雜誌」前半半分金壹圓八十錢以上拂込  
の讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載しま  
す何卒此際新構者を御勸誘下される様御願  
ひ申します御紹介下される方には「川柳雜  
誌」の近刊を見本として差上げますからお  
申込み下さい。(縁雨)

尾崎明晴(長崎柳秀) 堀深太郎(岩崎柳路) 長  
沖重治(小西無鬼) 松下小柳子(關本雅祐) 諏  
訪勳 山口鐵三、今荷千、小林正義、八田鐘生  
眞田泰典、小橋明治、今川喜一郎、北澤製生  
雄、橋本源悅、鷺田南耕、佐野踊、倉誠司、長  
景雄、中内松太郎(本社事務所) 括弧内紹介者  
轉居  
姫田夕鐘君は 濠區東田中町八丁目四四へ



# 川の幅

阿部 閑生

## 一、念 寫

優秀な畫家は時に見えぬ色を描き、亦時には聞えぬ音まで寫すことがある。透視といふことは特殊の性癖者に限られたものかと思ふこそうでなく、やれ云へば透視や念寫をやりさうな人がざらにある。が修練に伴ふ精神作用によるところから、これを證據立る立合實驗なきには何うも豫期明確さを缺いて判つきりしないが多い。結局固くなつて雑念が消えないからであらうと、冒頭に何故こんな事を書き出したか云ふと、ものゝ實相を見極めて、己が魂を寫出す點のみで考へるに、川柳も一種の透視であり念寫であるかも知れないと思つたからで、道理で自身には明確清楚であつても、他から

見れば朦朧たる句が多いのぢやないか。

詰りは精神統一の方法がまづいので、これを自分の作句態度について云へば、自然に湧き來たる感激に浸つて句を成すのではなく、促進感覺亦是強制感興とも云ふべき氣分を醸成して、何うでも一氣に仕上げやうとする所に多分の無理があり認めたる一句を隣き直して見つめてゐるに、感興が醒めるにつれて、これが川柳であることさへも怪しくなつて來るのは今更に作句の錯誤を悟る外はない。悟れば廢めるか云ふに廢めるのも淋しく、「終に無能無藝にして唯この一筋につながら」云ふ古聖の言に突き當る。

## 二、無 技 巧

嚴格に云へば創作は唯一句のみであつて他は盡く模倣である、技巧なくして創作なく、技巧は進むに隨つて次第に局限せられ、もの見方がきまり、現し方がさだまり、型が生れ、式がこゝなふからである、然し同じ嚴格さを以て盡くの句は創作であつて、模倣は一句も存在しないとも云へる、句の味ひは微妙な所に有るのであつて、全形を以て一局を相し難い意味で、安價創作は技巧を凝らした模倣に劣るまいふ反語ではない。

無技巧の句といふのは有り得ないものであらうが、その有り得ないものを捉へんとするのも無駄な努力とは云へまい、殊更にかまへず、企ます、むつかしく考

へずに、平易を徹して見えぬ色を描き聞えぬ音を寫し、實相を裸出した句を得るためには。

算式のない答を求むるためには、無技巧をば技巧と名づく、こいふ定義を作つて出直して見やうか。

### 三、不 易

われ等が日常生活の底に澄み切つてる一つの精神、持つてゆきまころのない一つの感情が、時代を貫いて變化し發展し、この線上に時代々々の大小藝術の殿堂は建てられてゐるのであつて、近代人こそ雖もこの線を踏み外しては詩の暗黒に陥る外はない、或は妖魔の吹くサイレンに一時迷ふても、心のふるさきを忘れ得ない者は幸福であらう、ミ斯うした見方で本誌の各欄に列ぶ一つ一つの句を味ふミ、思ひ／＼に個々の特質極りなきうちにも、不易の精神と形相とが句毎に明らかさまな亦はひそやかな瞳を光らしてゐるのが、認められるのである。

### 四、點晴の語

川柳の特質「がうがち」にあり、「ひにく」にあり、「見付け」にありさするものは元より皮相であるが、何が爾う誤らしめたか云ふミ、川柳は特に洗練を必要とする言葉の詩であるからで、表現に最も適切な言葉を選んだうへ、充分に研ぎを掛け磨き上げなければならぬ理由もここにある。

併しながら我等は如何なる思想も批判も、聲には出さない迄も言葉で組立てねば成立たず、言葉が先に生れて初めて思索も感情も大いに發達したのであるからここさら後から用語を探さなくとも、不準備な突差の言葉が即つて最も當て箆つた最後のものである場合もないではないが要するに詩の殿堂は一足跳びに土足のまゝでは跳び込めず、況して精緻をたうさぶ川柳に於ては、點晴の一語が大事に思はれる。

### 五、あすか川

私が飛鳥川を中心に、畝傍、橿原、久

米、壺阪さよく歩き廻り、綏靖陵の位置が違つてゐるの、役行者は南洋人だのミ戯れたり、時には夜半に友達ちが三組に岐れて、三山の頂きで同時に烽火を擧げて興じたりしたのは三十年前のことであるが、去年の春子供さ久々にこの地を散策した時、飛鳥川はこれかミ口にも出して呆れ果てた、本誌前月號の第一ページ

あすか川これかミ思ふ川の幅 路郎の句に直面しては少時傍目も振れなかつた、あすか川、富の小川、龍田川何れ名のみ川ではあるが、前に見た時は底のも砂も美しく、水も流れてゐた、今この草に埋れた變りやう、三十年は人一代の内では長い、それにしても二千餘年の古、大和民族がお玉杓子の様に飛鳥川の澗りに屯した時はこんなであつたらうか久米唄の作者達、萬葉の讀み人知らず達にこの句を見せたら、淵瀬涸れても、流れて盡きぬ詩歌の「川の幅」に、何ミ願を外して喜ぶことであらう。

# 各地柳壇

＝れ割を句るあちのい＝



## 本社十一月句會

於 端 の 坊

十一月六日

雲低い大阪の夜は秋の深さを思はずに十分であつた。秋に集ふ人達は作句の境地に心ゆくまで陶醉した。

〔六時半から十時過ぎまで三時間餘りたちつとも無駄のない様に進行せればならぬと考へてあます〕かくて私達は七題を征服した完全にかも倦むことなく。

「いつもの句會と變つたことを一つ試みたいと思つてゐます」かくて、山雨樓氏と町二氏に依つて席題「夕刊」の句は二分され、先づ山雨樓氏起ち句を詠み直ちに明敏なる頭腦で句の良否、新鮮陳腐、等々を判断せられたに町二氏は時間の都合で單なる被講に終つたことは諸兄と共に、残念に思ふものである。

更に當夜山雨樓氏プリント配布され廻覽誌をもくろまれ諸氏の句熱をいやが上にも高められたことには一同深く感謝した。

(愚陀記)

### 出席者

路郎主幹、綠雨、鐘生、無鬼、靖弘、豆秋、奇可愛、鶴峰、艸樂、ひろし、公二、洋々、光坊、繁堂、おさむ、默平、三碧、あや美、晴山、鮎美、觀月、卜居、坊茄子、白柳子、變人、一笑、明暗子、夢裡、山茶花、沐天、かほる、小柳子、公平、八歩、みつる、琴人、里十九、陽喜亭、新水、春齋、水車、柳次、柳仙、とも坊、秀樹、青踏、夕鐘、久耶、愚陀、よしかず、いわな、山抱子、山雨樓、雞牛子、町二

兼一題 路郎選

幸福な娘にフェルトの緒ががた、秀樹、光坊、追害のなかに二人で生きていこ

柳仙 幸福は孫にあまえてもらふだけ  
柳喜亭 幸福の目に怖ろしい記事ばかり  
靖弘 幸福なやうにも思ひ馬に乗り  
卜居 いろり火にほてり父と母と子と  
明暗子 幸福の半分だけを金で購ひ  
あや美 赤い屋根幸福そうな郊外よ  
みつる 幸福を祈つて戀を譲らうよ  
不思議 途寄りもせずし妻子と膳につき  
白柳子 子の貯金だけはごうやらしてゐま

能島君夫婦へ

唯金がほしい不平のあるばかり  
愛の巢へ今日採用の通知なり  
里十九 驛からはパパに抱かれて歸るなり  
豆秋 金で濟む幸福すらも望み得ず  
三碧 幸福の夢は枕も飛ばしてゐ  
春齋 幸福は長屋の奥に急ぐなり  
雞牛子 淡い幸福よ風船をふくらそ  
愚陀 子もみんな希望の朝を蹴つて起き  
山雨樓 貯めたのが幸福らしく住む  
綠雨 田舎 幸福の絶頂春の雲が飛ぶ  
公平 幸福そのもの様にレコード鳴  
詩録 幸福は破かぬものと決めて呑み  
同 おさむ 幸福の囀してくれと置手紙  
同 豊彦は垢をとおとして湯にひたり  
同 美人は垢をとおして湯にひたり  
久耶 (人)幸福を思ふ親子の茶碗むし  
青踏 (地)幸福の眞つたや中に無口者  
路郎 (天)幸福の傘さしてゆく人の呼吸  
路郎 (軸)大學を出て幸福が崩れかけ  
柳仙 笑聲國から母のくる話





部創立句會の呱呱の聲をあげた、集まるもの  
…華雪、つる、砂詩朗、現滴、沙紀千、  
天痴人、芥人、鐵扇、雪丸、玲人、卷二、山  
紫、みさを、大鳥居、浪耶、銀星百々耶、  
去水、月人、足立、都之介、暮秋の二十有餘  
名(米村あん馬、多久和喋朗兩氏の事故缺席  
は遺憾であつた。)惠まれたるこの晩秋の夜  
のまごゑを川柳境への陶酔に心行くまでひ  
たり生れ出でたこの會といひて若き人々  
の久遠の幸を祈つて散會したのは十二時す  
ぐる頃であつた、尙此夜本社縁雨氏及び鏡川  
支部から祝電があり更に私達のまごゑる意  
義あるものがあつた。

兼題 茶 釜 雪 選

艶が 出て茶釜三代無事な家 山 紫  
堀り出した茶釜へ和尚世辭がよし 三雷波  
氣まづさへ茶釜はたざるばかりを 都之介  
夜店から茶釜の値段見て 戻り 玲人  
茶袋の踊る茶釜の湯があふれ 雪丸  
老人の機嫌茶釜へ座らせる 卷二  
(人)成上り者へ茶釜は光つて居 同  
(地)寝められてからの茶釜は桐の箱 砂詩朗  
(天)大根賣り茶釜へ冷へ手を焼り 雪丸  
兼題 閨 華 雪 選

何かこうさせたか十八閨寛帖 雪丸  
閨寛の眼罪の輕重見逃さず 砂詩朗  
マルキスト何と見らる閨寛王 天痴人  
失戀の自殺を 閨寛何と見る 鐵扇  
恐ろしい程に閨寛の眼が据り 玲人  
閨寛王毒婦の媚をもてあまし 三雷波  
大臣が閨寛の前で叱られる 山 紫

善行を閨寛は恐はい顔でほめ 同  
笑ひたい時も閨寛は恐はい顔 同  
(客)閨寛殿割れ鐘聲のこだまのみ 都之介  
(客)釘拔を横に閨寛の晝寝なり 同  
(客)閨寛帖嘘の涙で通す氣か 同  
(客)アプロアルとみんな一緒閨寛帖 同  
(客)たゞ次ぎを待てる居のが閨寛帖 同  
(人)カルモチン閨寛を恐はい見話 鐵扇  
(地)火刑にしると閨寛は鬼を呼び 砂詩朗  
(天)唇の動き閨寛の瞳の動き 雪丸

兼題 薨度胸 砂詞 期 選  
薨度胸決めた喧嘩をのんでゐる 鐵扇  
薨度胸出發までには潔し 雪丸  
懐の動氣押へて薨度胸 都之介  
薨度胸フト上官の眼に停り 山 紫  
被告席憎らしい程薨度胸 華雪  
四五日は口をきかない薨度胸 暮秋  
(佳)えままよ着々着々膝を組み 硯滴  
(佳)さて女面白くなる薨度胸 天痴人  
(人)薨度胸押しの一手があがるばか 芥人  
(人)だアまつて居るは女の薨度胸 暮秋  
(地)本當の怖はさを知つた薨度胸 山 紫  
(天)薨度胸臍に力を入れて見る 卷二

兼題 月青 天痴人 選  
月青く柳に照りてグロテスク 硯滴  
月光へ地蔵の影もグロテスク 山 紫  
グロテスク刑務所の夜のうなり聲 卷二  
ひろがりし閨の未來にグロテスク 暮秋  
(人)かぶささ來そうな夜の枝ばら 都之介  
(人)庭石に追はれそなる底を抜 同  
(地)令嬢と列んで寫すアロドック 砂詩朗

(天)大臣へ魚眼レンズを倒つさま 同  
兼題 アスファルト 雪 丸 選  
アスファルト駒下駄の音が違つて來 砂詩朗  
アスファルトへ秋の日早く暮せり 玲人  
アスファルトを行く下駄の音天高く 天痴人  
空高く舗装工事に動く秋 暮秋  
アスファルト今日始めての團旗 華雪  
(人)アスファルトのトランプに更けた 卷二  
(地)微笑か何處まで行くアスファルト 暮秋  
(天)街燈が雨に生けるアスファルト 天痴人

兼題 宵 閨 暮 選  
宵闇へ廢城の如しビルゲンガ 玲人  
宵闇が棚の隅まで追つて來 砂詩朗  
微笑した顔へ宵闇が來た 都之介  
宵闇へカフエーの灯浮んで來 卷二  
(客)ルンペンへ宵闇寒く肌をさす 硯滴  
(客)宵闇の街へ乗合すべり込み 卷二  
(客)宵闇の街電飾の灯と灯と灯 芥人  
(客)宵闇に粉れこんだり脱獄者 同  
(客)宵闇が來たさ靴を履こう 華雪  
(人)宵闇だけが俺の涙を知居よ 天痴人  
(地)宵闇に派出所の灯がよみがへ 同  
(天)宵闇を縫ふて駈落ち的もなく 華雪  
(軸)宵闇よ僕の罪だけかばつとけ 暮秋  
兼題 奇 術 互 選

奇術師の錢も仕掛がありそうなる 砂詩朗  
ピストルを打つて箱から人が出で 華雪  
素人奇術やりそなつて面白し 天痴人  
奇術師の家へ歸れば病んだ妻 山 紫  
奇術する様には金が儲からず 同

現實は悲し奇術で生きてゐる支那奇術令が盛りのドラが鳴り不景氣を任せて見たら奇術師よ奇術師を真似て子供を寝つ奇術師は手近の客をよく使ひ奇術師の先づ小手調へ紙を切り宴會に社長の奇術皆が賞め

川柳 梅田支部句會 (大阪)

十月廿三日 里十九居 水谷鮎美報

雑誌社 兼題 猿廻し

とことん〜小春日和へ猿廻し猿廻し村の子供をうるささがり不景氣な正月と知る猿廻し猿廻し猿を叱つて歸りゆくお師匠の氣嫌がなほる猿廻し猿廻し渡しへるに猿をだき番犬におびやかされて猿廻し猿廻し草鞋を買ふて戻るなり(人)猿廻しこの藝當へ帽をぬぎ(地)猿廻し一人で出るとさびし(天)猿廻し密柑は猿と分けて喰ひ(軸)猿廻しはし味を教へ母が待ち

慕秋 卷二 鐵扇 玲人 つもる 同 坊茄子 夕鐘 新水 観月 鮎美 里十九 同 観月 里十九 新水 かほる 水選 方眠 里十九 観月 夕鐘 同 鮎美

(天)立聞きへひがみし心蓋がしく(軸)立聞きへもう交番の人拂ひ

兼題 小男 男 見せ

横縞を着る小男の絆を見せ小男の走る速さを笑はれて小男の負けては居らぬ口答へ小男の洒落は敬禮してるなり小男の吹き〜たべるかやくめし小男の派でな祭へ顔が利き(軸)不平あるその小男とのみ直し

兼題 色 街 夕鐘選(共選)

色街の袷せに寒い露が立ち途中下車色街一べん見て廻り色街の朝後悔とともにかきめ風呂屋から色街らしくなつてくる色街のがらんと朝のふところ色街の朝花賣りは雨にぬれ色街のさびし朝の陽があたり(軸)色街のまむきへ宵の灯がとも

ト居 新水 美選 夕鐘 新水 同 観月 かほる 同 鮎美 同 月 同 方眠 里十九 坊茄子 ト居 兼題 色 街 観月選(共選) 夕鐘 同 鮎美

席題 久し振り 互 久し振りおもかく財布出し合ふてかき船へおちついてゐる久し振り寝こんで久しい友と話しあひ久し振り白粉焼が目立つなり若旦那肩たゝかれた久し振り久し振り今夜も泊ることになり久し振り菊の徽章を附けて行き久し振りやないかと水屋開けて

觀月鮎美對座吟 (大阪)

十月廿二日 酒 鮎美居 水谷鮎美報

おそろしき女となりぬコツツ酒ほる酔ひへ稻の穂風の美しき獨酌の窓から見ゆる秋の雲秋ふかく酒に心のうげはるゝ人生に酒は流れて夢ふかくぶらりつと出たまゝ酒に魂が子のことを考へながら酒のみ

阪大川柳會十月例会 (大阪)

丸島利生報 兼題 「友」 路 耶 選

同期一同謹で白すと聲をのみ風月を友として金もためてゐる友人の様に陰では云ひふらし笑はせる友来て今日をすくはれしアルバムの妻の仲よしみな美人友なればこそ今の身に此の傾り落ぶれてはつきり友のあるを知り譏謗をこれ事とする友もあり君しかしそんなに飲むでいいの

里十九 夕鐘 鮎美 新水 同 観月 かほる 同 鮎美 同 月 同 方眠 里十九 坊茄子 ト居 兼題 「友」 路 耶 選 同 鮎美 同 月 同 方眠 里十九 坊茄子 ト居 兼題 「友」 路 耶 選



割り込む同志へ勞働歌が荒び  
おい咽へ俺の心の晴れるまで  
新歸朝宮川美子は歌ひづめ  
(人)優勝の校歌は節もおごるなり  
(地)下女陽氣に唄つて留守居番  
(天)藤枕虚偽を包んだ唄をき

髪 美

綱選

亂れ髪掻き上げ失戀飲んでゐる  
斷髪のマ、貢んぶしててくれ  
めつ毛りと白髪が殖えて案じさせ  
髪々の一トすじ横に青疊  
嫁ぐ日の髪は我が子を見違へる  
母老ひた事が白髪に隠されず  
(人)戦友の遺髪へ譯も泣き  
(地)結び立る髪へうれし母も来る  
(天)立髪へ霞がはれる馬の息

松陰 薔都 清花 二三鷹 綠之助 美綱

(軸)切れ文へ髪一とすじが

花選 興詩雄 綠之助 二三鷹 松陰 羅門 同 美綱 二三鷹

認印は責任輕い つもりなり  
實印の捺してはならぬ手がふるひ  
判取帳真直ぐな 印見當らず  
血の慘む思ひでやつと印を終え  
スタンブ(今は悲戀となりけり)  
(人)スタンブへ母は淋と目を數へ  
(地)就職へまづ印章のよみがへり  
(天)印一つ一家路頭に迷はしめ

印 清

而笑子忌今年も稻の稔る頃  
其の人を知らず而笑子悼む吾れ  
先生が来ます宵なり菊の花  
新顔も年忌をつとめよい後生  
植て逝く柳に茂る枝の殖へ  
川柳の佛で知れる龍興寺  
接木して又しけるなり媛柳  
白菊の香りも高し而笑子忌  
柿の頃子規と並んで唄はれる  
今年の月ま丸の中に而笑子忌  
面影は菊の薫りの中に浮き  
至らざる我れに尊ひ鞭であり  
燈明へ思ひ出めくる秋になり  
菊の秋偶ふ派兵衛揚場町

羅門 薔都 清花 二三鷹 綠之助 美綱

而笑子忌今年も稻の稔る頃  
其の人を知らず而笑子悼む吾れ  
先生が来ます宵なり菊の花  
新顔も年忌をつとめよい後生  
植て逝く柳に茂る枝の殖へ  
川柳の佛で知れる龍興寺  
接木して又しけるなり媛柳  
白菊の香りも高し而笑子忌  
柿の頃子規と並んで唄はれる  
今年の月ま丸の中に而笑子忌  
面影は菊の薫りの中に浮き  
至らざる我れに尊ひ鞭であり  
燈明へ思ひ出めくる秋になり  
菊の秋偶ふ派兵衛揚場町

羅門 薔都 清花 二三鷹 綠之助 美綱

而笑子忌今年も稻の稔る頃  
其の人を知らず而笑子悼む吾れ  
先生が来ます宵なり菊の花  
新顔も年忌をつとめよい後生  
植て逝く柳に茂る枝の殖へ  
川柳の佛で知れる龍興寺  
接木して又しけるなり媛柳  
白菊の香りも高し而笑子忌  
柿の頃子規と並んで唄はれる  
今年の月ま丸の中に而笑子忌  
面影は菊の薫りの中に浮き  
至らざる我れに尊ひ鞭であり  
燈明へ思ひ出めくる秋になり  
菊の秋偶ふ派兵衛揚場町

羅門 薔都 清花 二三鷹 綠之助 美綱

而笑子忌今年も稻の稔る頃  
其の人を知らず而笑子悼む吾れ  
先生が来ます宵なり菊の花  
新顔も年忌をつとめよい後生  
植て逝く柳に茂る枝の殖へ  
川柳の佛で知れる龍興寺  
接木して又しけるなり媛柳  
白菊の香りも高し而笑子忌  
柿の頃子規と並んで唄はれる  
今年の月ま丸の中に而笑子忌  
面影は菊の薫りの中に浮き  
至らざる我れに尊ひ鞭であり  
燈明へ思ひ出めくる秋になり  
菊の秋偶ふ派兵衛揚場町

羅門 薔都 清花 二三鷹 綠之助 美綱

而笑子忌今年も稻の稔る頃  
其の人を知らず而笑子悼む吾れ  
先生が来ます宵なり菊の花  
新顔も年忌をつとめよい後生  
植て逝く柳に茂る枝の殖へ  
川柳の佛で知れる龍興寺  
接木して又しけるなり媛柳  
白菊の香りも高し而笑子忌  
柿の頃子規と並んで唄はれる  
今年の月ま丸の中に而笑子忌  
面影は菊の薫りの中に浮き  
至らざる我れに尊ひ鞭であり  
燈明へ思ひ出めくる秋になり  
菊の秋偶ふ派兵衛揚場町

紫石 欺虹 柳女 松葉 松葉 雙葉 流矢 春峰 耕樹 靈子 青村 拓水 紫石 松葉 雙葉 流矢 春峰 耕樹 靈子 青村 拓水

(天)朗かに笑ふて金の無い男  
(軸)理屈とは別な笑ひの朗かさ  
炬燵から羽織の衿を注意され  
後ろ前羽織の舞が座を湧かせ  
うたゝ寝へ羽織をかけた四疊半  
粹の妓の羽織肩から江りさう  
愚痴を云ひ中二三の羽織かけ  
村の寄り中に二三の羽織かけ  
借り羽織チト袖口が氣にかゝり  
八百屋モウ羽織で隠す譯を知り  
羽織説く程奥様の用はなし  
停車場へ来ると羽織を直さる  
四疊半羽織をかゝす面白さ  
羽織着て閑な看護婦讀んでゐる  
(人)壯麗き羽織の襟に手がかゝり  
(地)立膝の羽織を引くと裏が鳴り  
(天)姉藝者らしく羽織の收まり  
(軸)繩腰産羽織の人に部屋があり

拓水 柳女 松葉 耕樹 春峰 靈子 雙葉 流矢 紫石 青村 靈子 青村 拓水 紫石 松葉 雙葉 流矢 春峰 耕樹 靈子 雙葉 流矢 紫石

水 樹 選

追悼吟 前田五健報 夢郷

而笑子翁忌川柳會(松山)



承諾へ涙はじつとして居らず  
承諾を女涙の中にあり  
承諾の二字が男の意地で出る

同 鐵 扇

閉會へ一切残る刺身皿  
(人)刺身皿の醬油を呑んで酔居る

同 天痴人

(地)人間を恨んで刺身出来て居る

同 鐵 扇

(天)習慣にされて月給日の刺身

都之介

刺身など出して今宵の客にされ  
珍容の眼をひくもの

同 巷 二

閉會へ一切残る刺身皿  
病む母へ鯉の刺身をすゝめて見

同 天痴人

(秀)刺身皿の醬油をこぼし酔居る

同 房 選

決闘の後靜かなる月が冴え  
決闘にピストル頼み甲斐もなく

同 大鳥居

世間から見た決闘の阿保らしさ  
月青く青く決闘向ひあひ

同 墓 秋

決闘にピストル頼み甲斐もなく  
決闘の勝敗目に任せて居

同 天痴人

(人)決闘の意氣を示した左り封  
(地)決闘の互に迫る眞劍味

同 大鳥居

(天)日青く青く決闘向ひ合ひ

都之介

脳味噌の整理にやせて哲學者  
脳味噌の足りない奴の穩し藝

同 巷 二

(秀)脳味噌の何處を忘れた白痴の子

同 墓 秋

川柳雑誌社  
御池橋支部 十月例会(大阪)

席題 樂 屋  
死方が拙いと叱る樂屋裏  
集金に行けば樂屋へ通される  
樂屋入りお晝過ぎでも皆お早よう  
お白粉の香ひ樂屋の狭すぎて  
出前持樂屋で春に目覺めて來  
そば一つ樂屋にのびた儘残り  
青空へ樂屋の欠伸つゝくなり

同 忠 彌  
宏 朗  
木 星  
い わ を  
同  
靈 壺  
靈 壺

席題 すき焼  
すき焼の姐さんカツなことをいひ  
黄昏が、山にすき焼匂ふなり  
すき焼を讀めて外い飯を喰ひ  
すき焼のあとで小供をひさに乗せ

同 宏 朗  
三 碧  
い わ を  
か ほ ろ

席題 特價品  
特價品人人の手に揉まれ  
特價品國へも一つ送るなり  
特價品かきまわし見て買はぬなり  
特價品豫算超過へ氣が荒し  
モカの手がスルリと抜けた特價品  
呼聲が高いばかりの特價品  
特價品母は買ふ氣になつて居り

同 忠 彌  
三 碧  
宏 朗  
靈 壺  
同  
靈 壺  
い わ を

兼題 地下室  
ぼんやりと地下室の灯の暗くして  
地下室の濕氣に生きてやもりいる  
地下室へ笛笛遠く聞ゆなり  
いらぬい机が殖える地下室  
足取りも軽く地階へモホとモホ  
地下室へ遠う草履をはいて下り

同 白 石  
壊 次  
い わ を  
三 碧  
忠 彌  
か ほ ろ

川柳雑誌社  
鶴町支部 鶴町川柳行脚

(大阪)

兄の名な變へて教科書使つて居  
古本へ夜店の灯ちよつとゆれ  
雜沓をよそに夜店の古本屋  
古本を漁つて秋の夜は長し  
古本屋一風變つた人であり  
古本屋一風變つた人であり  
整理する古本趣味の友へ遣り  
古本屋焚りはたいて見せてくれ  
古本屋煙草の煙眺めて居  
今日も又古本出した老眼鏡  
古本へ又古本背をまるくして  
古本屋啄木だつせと値をまけず  
(人)古本の店へ木の葉が散る月夜  
(人)あの邊におましたと古本屋  
(也)古本へ苦學の跡もはつきりと  
(天)古本に活てゆく事教へられ  
(軸)秋の夜を壁の匂ひのする詩集

同 一 笑  
三 丁  
一 枝  
三 郎  
秋 月  
錦 石  
紅 月  
の ぶ を  
琴 風  
小 柳 子  
一 笑  
雅 幽 人

題 相 談  
相談にはるゝ來るも父の恩  
長い智恵を借りて相談持つてくる  
相談の上で嬉しい日を定め  
腹さぐり合ふ相談へ時間立ち  
金貯めて相談ことは逃げてゐる  
相談をまとめた丈が年長者  
相談はまた冷めきつたお茶をつぎ  
相談に幹事の聲が高くなり  
相談へ座長机を控へたり  
相談を一人だまつて聞いてゐる  
相談がなつて黒煙活氣あり  
醉はされていつか相談されてゐる  
夜が明けて死ぬ相談は寝て仕まひ

同 雅 幽 人

川柳雑誌社  
鶴町支部 鶴町川柳行脚

(大阪)

川柳雑誌社  
御池橋支部 十月例会(大阪)

(大阪)

關本雅幽選

さて金となつて相談灯をともし  
相談へ妻は無口を助けに出  
相談のきつちり座る足袋の裏  
(軸)相談が出来て二人は歩きだし  
(同)號外の鈴に相談立つてゆき

麻生霞乃選

寛柳

睦しさ肩と肩とが語つて  
肩までも見えそうに着る仲居なり

寛柳

退營の嬉しい肩へ三つ星  
評判の養子厚司の肩が抜け

一枝

段梯子肩で息する母となり  
腕組んだ肩へ蝗が飛んで来る

白峯

嫁にやり嫁とり肩の荷がおりた  
満員車肩へ乗換聞きにふる

秋幽

肩掛をさつと丸めて久しぶり  
入墨をこれ見よがしに肩を脱ぎ

山月

肩組んで寫した頃のほがらかさ  
脂氣のない肩へ灸すゑて居る

のぶ

肩の重さへ心ひきしめ  
肩へまで心を見せた怒りよう

岩石

半生の苦悶が残す擔つたこ  
凝りきつた肩へ夫の指の先

同

二十才はかなし肩をとる娘  
眼のあたり肩上浮ぶ妻であり

同

肩章へ唯ハイと老巡查  
シヨール巻下肩のあたりの處女

同

肩を揉む時だけ嫁の喜ばれ  
肩へ来る坊に編む手が止んでゐる

同

(佳)誘惑の手は肩に延び背を打つ  
(同)からもなるものかと母の肩

同

雅幽

錦石

同

同

同

同

同

同

同

同

(同)我がそばの女の肩のおそろしく  
(同)肩揉む親は財布へ手をかける  
(人)負けたのも赤い夕陽へ肩組ま  
(地)笑ふのも泣くのも肩の圓み  
(天)悪友は目ざとく肩を打たれる

小柳子

十一月四日

於塗料青年團事務所

熊谷紅報

一年生

優等生で一年は姉泣かし  
看板に讀めぬ字もある一年生  
今日からの辨當が嬉し一年生  
女教師へまた泣いて来る一年生

紅選

有料になつて天主閣見られ  
種ヶ島此所から打つた天主閣  
夕暮を壁澄み切つて天主閣  
夕暗へ五位驚急ぐ天主閣  
日本一名も大阪の天主閣  
天主閣登りて偲ぶ豊太閣  
繪のやうに朝日を受けて天主閣  
大阪の躰ともなつて天主閣  
(佳)天主閣汗と膏で出来上り  
(同)侍がまだ居りそうな天主閣  
(同)軍閥を今に残して天主閣  
(軸)月丸ふ濠へ天主閣の影

紅選

基純

波計

三丁

淡海

滋芳

波計

淡波

光路

雅紹

波計

光路

紅選

基純

光路

水枕モよろしいと聽診器  
公休日子供に枕取られたり  
折靴枕に夜行寢てしまひ  
(人)平常は顧みられぬ水枕  
(地)減俸の枕へ早い秋が寄る  
(天)空想を枕へせて寢つかれず

紅選

落付いた態度へ相手氣をくじき  
落付いた居直り飯も喰ふてゆき  
八卦見のさて落付いた咳拂い  
落付いて投げた最後は四球なり

光路

落付いた態度へ相手氣をくじき  
落付いた居直り飯も喰ふてゆき  
八卦見のさて落付いた咳拂い  
落付いて投げた最後は四球なり

光路

(同)入社して今日落付いた箸を取  
(軸)言は言はせてやをら眼鏡越し

光路

明珠居小集 (神戸)

十月十四日

西村明珠報

席題 輕 卒 竹 風選

輕卒へ女房利口な顔をする  
輕卒の機で藝者が惚れてゐる  
輕卒な家出へ街の風寒し  
輕卒な男が今日は見合つき

輕卒へ課長笑つて判をつき  
(佳)輕卒をいましめらる國を出  
(軸)輕卒に嘘が出て来る嬉しい日

席題 肉 体 春 竹風選

肉体に鹽風が鳴る沖で生き  
秋の日にモデルへさした肉体美  
慘劇へ肉体美が惜しまれる  
肉体美の客にからかまれる

肉体の讚美へ秋が暗れてゐる  
鬼笑太

明珠

主税

笹舟

明珠

秋選

竹風

明珠







罰金をとつてやらうと呑み仲間  
罰金をおごしつけてる交番所  
反則へ一日の汗ふいになり  
罰金は覺悟の上で儲けてゐる  
同 水車  
同 鶴峯

淫鷺居川柳句會 (大聖寺町)

十一月二日 江守 白花子 報

風見草が泣かず飛ばすで既に一ヶ年句會  
の空氣も忘れかけたが、八月に一回更に今回  
洗心館龜谷溪鷺居で盛大に一月の會合をや  
り川柳三昧に浸る事が出来た。

兼願 魂 漢 鶯選

(秀) 年金になつて魂とほとまされ 燕子花

(同) 境遇に魂までが左右され 雪杖  
(同) 生活の色に魂染め上り 亂雨

席題 腕 茶撫朗選

(秀) 夫業の腕とは見えぬたくまじ 酔羊

席題 羊 凡一 老選

(人) 風の夜を半屋だけ灯をともし 亂雨  
(地) 羊が好きですこの子も女 燕子花  
(天) 羊喰つてみん不平を引返し 白花子

席題 夜 勤 吉 祥選

(人) 大物の懸つた夜の検事局 白花子  
(地) ストープへ夜勤の疲も来る 眺水  
(天) おうさんが来てから夜勤働 茶撫朗

席題 父 白花子選

(人) 父と来た淋しさを知る女の子 燕子花  
(地) いつかの父の言葉にぶつ 吉祥  
(天) 不景氣の眞只中に父となる 亂雨

席題 消 毒 雨選

(人) 濁心を消毒するに安い酒 白花子  
(地) 手を洗ふ博士に浮ぬ顔が寄り 茶撫郎  
(天) 神経の先に消毒器が光り 同

聖城川柳會同人寫眞説明 向つて左前列 酔羊  
亂雨、漢鷺一寛、不明(中列) 柳鷺人、茶撫朗、雪  
枝、水玉、燕子花後列山々、吉祥、眺水、白花子



奉天川柳會九月例会

九月十一日 於滿鐵俱樂部

滿洲撫順にて 岩崎柳路報

席題 瞬間 白洋氏選

瞬間に踏切番の棒が下り  
瞬間に握る拳の青い筋  
三面の記事に孝行フト思ひ  
横切つた子の瞬間へ聲がもれ  
間髪を入れず映畫は落ちのびる  
(佳) 瞬間の眼と眼何やらある暗示  
(同) 人ごみのもう懐に財布なく  
(同) 三下りフト養子の身を思ひ  
(軸) 口答へする瞬間へ来る拳固  
球落す其の瞬間へ上り込み

席題 責任 互選

責任のやり場に迷ふ子を孕み  
責任は一蓮と云ふ總辭職  
責任を通れ東風麻雀續いて出  
責任の無い身に秋を淋しかれず  
裏書の責任へフト寝つかれず  
謝辭を述べ責任があり床柱  
(佳) 責任を送り届けて酔つて居る

宿題 親指 木耳氏選

親指に噛みついて泣く眞きらい  
親指の力へ顔が熱くなり  
親指を出して母親目で知らせ  
親指で壺を押へて置く艾  
親指の箇處で減つる桐の下駄  
親指のさきも朗な高笑ひ  
親指の寢息へソツトものを云ひ

連樂 木耳  
新朗 木耳  
保月 登美坊  
登美坊 木耳  
新朗 登美坊  
白洋 柳如  
木耳 新朗  
登美坊 連樂  
登美坊 連樂  
木耳 登美坊  
新朗 登美坊  
木耳 登美坊  
白洋 柳如  
木耳 新朗  
登美坊 連樂  
登美坊 連樂  
木耳 登美坊  
新朗 登美坊  
木耳 登美坊



記念祭歩哨の剣に緋だうつり  
勇しく撃つ記念日の號砲よ  
(佳)記念碑の墓までよんで待てる  
(同)記念樹母校の門に高く伸び  
(同)御手植えの松へ遠足整列し  
(同)フト記念とく日記に赤く書ひ  
(同)退院の記念の晝がよ似合ひ  
(人)優勝旗の前で記念の寫眞撮り  
(地)氣の合つた二人記念の櫻杖  
(天)光榮の村に記念の松は伸び  
(軸)凱旋の記念灯の海旗の波  
(同)訪日の記念キモノを着てうし

川柳雜誌社 十一月例会 (神戸) 支部

十一月十二日 於 八宮神社 西村明珠報

兼題 洋酒 春 秋 選  
ウキスキー外國に馴れた手てわら  
カクテルへネオンサインが窓に浮  
マダムまだ子無く洋酒の酔ひで寝  
カクテルへあばずれ女足を組み  
日本酒洋酒の方も少し飲み  
女給には勝てぬガラスの赤い酒  
唇へ洋酒にぬれた嘘が乗り  
自分呑飲みキボケツトウキスキ  
貰つても讀める字がない洋酒壺  
喫茶店洋酒とミルルとが列らび  
カクテルの酔ひに巴里の夢が浮く  
(佳)キユラソウ銀座裏で逢二人  
(軸)上海の夜のテールの青い酒

錦石のぶを 紅碧郎 雅幽 變人 のぶ 一石 變人 同 秋 月

級長の家では喇叭叱られる  
我儘を許さぬラッパ鳴りひびき  
天主閣朝の喇叭に暗れてくる  
母ちやんのお針へ喇叭よく響き  
少年喇叭不平を云はさない  
少年喇叭下手でよし下手でよし  
(佳)吹きまくる喇叭左側をやつ来  
(佳)二階から喇叭の稽古空を向き  
(佳)學校は暮れて喇叭の子を許し

席題 露骨 嶺 月 選  
病室を出ると露骨に醫者は云ひ  
うねばれへ露骨な皮肉少しき  
子供心に叱られた事も告げ  
首になることを短辯露骨過ぎ  
友達へ露骨に言へば頼られる  
友達へ露骨に言へば頼られる  
身なしに露骨な口がふと悲し  
猥談の名手締切なしに述べ  
(人)呼び捨聲名がむごい不具脚  
(地)白足袋を穿いて露骨に云ふ男  
(天)口紅な惚れたと四十男云ひ

華水 旅雨 同 太 珠 明 睡 旅雨 竹風 主税 華水 春 秋

(佳)賣切れに言葉の多い小商賣  
(佳)賣切れを丁稚に至るまで誇り

席題 突 然 睡 花 選  
突然な言葉烏がないています  
突然の語に困る姉妹  
突然にかくそうとしたよい話  
刑事室突然嫌なものを見せ  
突然に來て割箸をわり乍ら  
何故もつと早く云はねと金の事  
明日にでも貰へる様な勧めやう

(佳)愛といふものを突然尋ねられ  
(佳)見忘すれた顔が突然笑ふなり  
(人)娘突然二人の孫と戻つて來  
(地)秋の夜の男突然日をたづね  
(天)取込みへ突然戻る不孝者  
(軸)突然に來てわけもな夜昆布

席題 得心 紋 太 選  
得心は骨にこたへた返事なり  
得心がゆかぬ藝者の懐手  
聞き分けた弟少し泣いてゐる  
妹を得心さすに姉がゐる  
得心をさせて淋びしい秋を踏み  
得心の出來た父親咳にむせ  
叱かられて以來辛棒しめる子  
得心のゆく顔に幸金ののり子  
得心をしたのと下りる寺の坂  
(人)得心をして算盤に用はなし  
(地)貧乏をはつきり知てもういはず  
(天)今迄の怒りへ煙草つけてやり

華水 春 秋 主税 明 睡 秋 春 秋 華水 旅雨 同 太 珠 明 睡 旅雨 竹風 主税 華水 春 秋

席題 喇叭 素 生 選 秋

春 秋

席題 大 聲 互 選

選







# 本社基金 御芳名

(受付順)

贖金を拜受しました方々の御芳名を

録し御厚志の程を深謝致します。

金拾圓也

神戸支部殿

金參拾圓也

橋本緑雨殿

金貳圓也

岩崎松代殿

小計 四拾貳圓也

累計金 三百七十一圓十錢也

## 社告

### 本社基金募集

【川柳雜誌】が柳壇の力強い存在として創刊以來八星霜に亘り獨立自營、致々として其標榜たる川柳の社會進出、質的向上、量的發展の大旗を掲げつゝ、力一ぱいに奮闘して來ましたことは諸君の夙に御承知の事と存じます。これと申しますのも、わが社の主義主張に賛同され、直接間接、大なる御聲援と御助勢を頂きました皆様御愛護の賜と深く感謝してゐる次第であります。今や多幸なるべき辛未柳壇を迎へ、つら／＼過去現在の實績を顧み、更に將來を深思しますまきに、本誌の使命の益々重大なる事を自覺する次第であります。しかしながら如何に絶大なる熱に燃えつゝあることは云ひましても物質上に恵まるゝことの薄い同人社友の意氣だけでは到底充分なる躍進的効果を擧げることとは容易ならぬことと存じます。さうしても川柳に熱を持たれ

【川柳雜誌】を愛して下さる諸君の御力添へを仰いで時勢のテンポに副ふべく現在の状態よりも、より以上に積極的な書策の實現に努めなければならぬことを痛感するのであります。

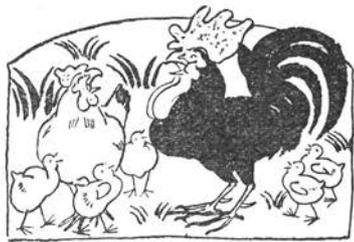
就きましては去る一月十四日の社友同人會の席上充分審議を重ねました結果、左記規定に依りまして各位に淨財の御喜捨を願ふことと致しました。何卒本社の微意のあるところを諒みせられ本社關係の方々は勿論、大方の各位に於かれましては本計畫の爲め奮つて御申込あらんことを祈ります。

昭和六年二月

## 川柳雜誌社

規

- 一口一圓以上とし、幾口にても御申込願ひたく、一口以上であれば端數がついても結構です。この意味は全くの淨財の喜捨を仰ぎたいからです。
- 御送金は大阪市住吉區平野西之町 八三 川柳雜誌社事務所内、基金募集係宛になるべく(振替大阪七五〇五〇)が爲替でお願い致します。
- 〆切期日は別段定めませぬがなるべく本年中に一先づ打切りたいと思ひます。
- 御芳名は誌上に録し領收の證と致します。
- 基金として拜受いたしました分を誌代に振替へ又は誌代を基金に振替へる等のこととは御用捨願ひます。
- 御喜捨は現在の社の經常費に充つるものではありませぬ、將來への堅實さを保證せしむるためのものでありますから、その點御含み願ひます。



## 編輯の窓

路 郎 生

▽戸外の風に脅やかされながら十二月號の編輯後記を書く。

▽營利に専念する雑誌すら維持困難の時代にあつて本誌が何等の跋きもなく刊行を続けられることは一つに寄稿家諸賢愛讀者諸氏の賜であると云はればならない。我等社友同人は歳末に際して特に感謝の念を深くするものである。

▽支那の戦争も何處までひろがるものか私にはトント見當もつきかねるが各地の柳友の身の上に事勿れとのみ祈つてゐる。

▽岩崎柳路君は撫順に落ちついた。そして「蛇皮線」の人々と交じはりを結んでゐる。柳路君のために交誼を厚くされてゐる撫順川柳會の人々へ遙に感謝する▽月評會を十日の夜、里十九居で開く。町二、琴人、素人、ひろし、愚陀の諸君集る。

▽十四日の夜、湊町の鐵道クラブで、本社社友同人の集りをした。兼題について入念な選評をした。句の粒もそろつてゐるし、人数も座談にふさはしい十二人、キリストの晚餐のやうに長卓を圍んで語り合つた。十時から席を改めて盃に親しんだ。

▽前號で霞乃が「女装せる男性作家に與ふ」なる一文を発表した。ところが、次號へも投句してあるので棄て、いただきたいといふ意味の端書が舞込んだ。

續いて同人から深謝の書簡が届いた。その書簡には純情が披瀝されてあつたので霞乃も大いに諒としてゐるが、句作上大いに

研究したいといふのであれば、敢て光耀抄に句を送つたりしないで、編輯局同人にでも送句して選評を乞へばいゝだらう。

## 年賀の廣告を募る

▽奮つて申込まれたし△

柳友交誼のため

## 一口 五拾錢

幾日でも申込んで下さい。一頁希望の方に限り金七圓。一口分の原稿はなるべく簡単にお願いします。

▽申込期限十二月十日迄

(新年號掲載)

大阪市住吉區平野西之町八三

## 川柳雜誌社

振替大阪七五〇五〇番

廣告申込はなるべく振替を御利用の上前金に願ひます(三錢以下の切手代用でも差支はありません)

▽萬よし老が同士と共に大阪無産新聞社を設立した。その社の三項の主張といふものを見ると「弊社は勤勞階級の味方であつ

て資本家の味方ではない」「弊社獨立獨歩の地位を確保して政黨及組合の機關紙ではない」「弊社は主義主張のために論陣を張つて營利のために筆を取るものでない」とある。十二月五日創刊で五日、廿日のセミ・モンスリー紙である。私も賛助員席末を汚してゐる。川柳家諸氏の應援をのぞむ。

▽大好評の「柳の絮」の續稿が執筆者長野吉高氏の御多忙で本號を飾る運びに至らなかつた。愛讀者の御諒恕を乞ふ。その埋め合せとして別稿「くれのたわ言」一篇が届いた。「柳の絮」の執筆者を目のあたりに見るこちがしてなかゝに興趣の深いものである。

▽川柳史秘話として特に好評サクゝたる秋農屋梅本高節翁の「川柳幽明無線電話」は本號をもつて完結する筈であつたが更に書き洩らした事項があるからとて畫龍點睛ともいふべき續稿「

其七」が編輯局へ届いた。これは新年號のお楽しみとして豫告し置く。

▽御旅支部の十一月例会が十七日の夜、松屋町の松之座旅館で開かれた。こゝは往年女義呂昇が永らく、ふんばつてゐた松の座のあとである。呂昇の部屋であつたとか聞く階上の座敷と庭を隔て、私達の句陣が張られた。尤も夏にも一度この部屋で作句したことがある。路鳥、香雨、多郎、圓角、の諸君と小生の五人が、しんみりとして句作に耽つた。センチメンタリズムの作家翠夢君が多忙のために珍らしく欠席した。早くから顔を見せる菅のみつる、あや美兩君さへ不参した。

▽食満南北氏が泉州日日新聞に「堺と私」を連載した。その後をうけて「堺の横顔」を連載しつつある。ところが南北氏は目下關西中央新聞に「人間日蓮」を連載中である。そうすると、そのあとをうけて私も又「人間基督」を書かればならぬかも知れる。日蓮宗の家に生れた南北氏

が「人間日蓮」を忌憚なく描出せんとするのであるから一大傑作たるは期して待つべきであらうし、基督教の洗禮をうけて「神キリスト」よりも「人間基督」に親しみを持つ私であるから、私が若し「人間基督」を書くとしたら、アプト・ンシンクレヤの「人われを大工と呼ぶ」以上のものを書かればならぬことになるだらう。ヤツタロー。

▽本誌の表紙を揮毫した大西長三郎氏等のロケット洋書展覧會が十一月十四日から十七日迄朝日會館で開催されて晩秋の關西書壇を賑はした。

▽本誌賛助員嘉納純氏が喘息の發作に苦しんでゐられる旨の新聞記事に影からす驚かされ、長崎博士の令息が近年發作しなくなつたといふ例も聞いたので、その療法をお傳へしたところが「該記は過去に談する小生の喘息に關する漫談を記者が興味半分に業々しく書き立てられたものにて、それがため貴下に對しては思ひもよらぬ御醜慮と御手敷を煩し」云々との回答があり

近來は先々平穩に經過してゐられるとのことである。本誌關係では曾ては長崎博士の令息、今もなほ寄稿家蛭子省二氏、同人藤里好古君がこの難病に惱まされてゐる。せめて發作の起らぬやうに手當が出来ぬものかとひそかに同情に堪えぬ。

▽金吾中納言喜多秀家卿の末裔喜多秀穂翁の傳記がいよいよ翁の第七十三回の誕辰日の十一月二十四日に刊行された。執筆者の僕も肩の荷が下りた。傳記、殊に生きてゐる人の傳記執筆に伴ふ至難さをつくつく味つた。私たちが自叙傳をかくとしたらそこにござだけの眞實を傳へ得るか疑問であると思つた

▽政界の大久保彦左衛門千石貢翁が亡くなりました。私は昨年だつたか花屋旅館で千石さんにお目にかゝつたが、その時にはまだ元氣であつた。あの堂々たる體軀で大きな座布團の上にごつかも坐つてゐられるところ

は、いかにもお殿様然としたところがあつた。奥さんには東京の千石邸でお目

にかゝつたが、思想的になかなかハイカラな夫人だつた。千石さんが工學博士であることを亡くなられてから知つた。博士號をとることが唯一の目的で勉強する連中とエライ違ひだ人間は肩書が無くて光るところまで行かれば眞の偉人ではない謹んで千石さんの訃を悼む。

### 短冊領布(新春用)

筆者 麻生路郎先生

上製短冊 一葉 金參圓送費不要、締切十一月廿日限 作品は入金順に發送、振替は「大阪七五〇五〇」を利用されたし

大阪市住吉區平野西之町八三番地 川柳雜誌社事務所内、短冊領布係

▽故辰己離楓君の遺著「離楓集」が弟思ひの令兄辰己利文氏の手で刊行された。離楓君は川柳雜誌の句風に親しんでゐた作家だけに、句数は少なかつたが、しみじみとした味のある句を遺してゐる。

### 投稿規定

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め住所氏名雅號を明記する事

▼第一線への投稿は社友同人及推薦作家と近作柳樟春秋點及近作柳樟線の推薦作家を除く(の欄とす)但し同一人にて兩欄への投句は遠慮され

▼光澤抄は女性作家に限る

▼春秋點、近作柳樟及光澤抄の作家中より優秀作家を第一線欄へ推薦するものとす

▼各地會報は半紙列の原稿紙に清記の事

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事

▼書體はなるべく楷書(川柳雜誌原稿)と封筒に未記する事

▼締切は嚴守されたし

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事

## 募 集

### 第九卷第二號課題

十二月五日締切

(各題十句以内)

#### 近作柳樟

松丘 町二選

#### 婚

麻生 葭乃選

#### 沈黙

中澤 濁水選

### 第九卷第三號課題

一月五日締切

(各題十句以内)

#### 近作柳樟

安井 ひろし選

#### 表情

川村 花菱選

#### 洋室

岩崎 柳路 共選  
中見 光路

### 每 號 募 集

#### 春秋點

麻生路郎選 (五句以内)

#### 光耀抄

麻生 葭乃選 (無制限)

#### 各地柳壇(會報)

文章(評論研究感想吟行漫文)

### 社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

### 定 價

一部 金拾拾錢

一 半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢

壹箇年前金(特輯號共)壹圓六拾錢

(半々年分以上御送金の方に)

(は投句用箋を贈呈致します)

### 料 告 廣

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます

▼御送金は彌替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でし候へば願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指額願ひます▼轉居又は改名等の時は最新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和六年十一月廿五日印刷  
昭和六年十二月一日發行

第八卷第十二號  
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸 二

發行 大阪市西成區千木通五丁目七番地 柳雜誌社

大阪市西成區千木通五丁目七番地 電話天下茶屋二五七九番

大阪市住吉區平野西之町八三番地 電話天王寺一六七番

振替大阪七五〇五〇番  
電話天王寺一六七番

### 川 柳 雜 誌 社

### 賣 場 書 店

(大阪) 大賣捌 二盛社書店。(明文堂 其他 市内 各書店)

(東京 仲見世) 玉森堂(神戶) 米田、後藤、寶文館(函館)

石塚(京都) 三宅(松山) 弘文舎(石川縣) マコトヤ



古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速参上確實

迅速に御取引致します。

### ▲日本橋

を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が従來の店の一軒置いて北隣へ移りました。従來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

# 公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 一 番

### ▼本社の特典

「川柳雜誌」は愛讀者のものとして、振替用紙で御送金の場合は、振替用紙に御送金の手数料を本社で負擔致します。振替は確實で送金と通信が出来ます。代半ケ年分以上御送金の方には、本社規程の投句用箋を贈呈致します。

### ▼本部聯合會

本社吉例の京阪神支部聯合會を左の通り開催致します。例年此句會から川柳の味ひ始めて上達される方が多いので、川柳を作つてみようと思はれる方々の御出席を歓迎致します。

▼時 日 十二月六日午後六時半(日曜)

▼場 所 大阪市南區日本橋一丁目交又點北の辻東へ入日本橋俱樂部

▼兼 題 元日三句 麻生路郎選

▼同 奮闘三句 庄萬よし選

▼講 演 (川柳詩人の夢) 選 麻生路郎

▼會 費 金參拾錢

▼出 席 者 全部に投句用箋一冊進呈

▼兼 題、席題三光に呈賞

▼寄贈品の副賞多數あり

(出席者に限る)

主催 關西各支部

### 綠雨居小集會

十一月八日午後六時より

兼座「熱心」

會費 不要

▼本社事務所にある他の柳誌を見ながら語りませう。別に案内状は出しません。御遠慮なくお越し下さい。(綠雨)

場所は住吉區平野西之町八三(市バス平野線クマタ停留所) (下車東南約四丁) 市設住宅

### 懸賞川柳募集

題「雪」

十二月十日締切

その他雑吟を募る

▼用紙 官製ハガキ(化粧柳壇と明記の事)

▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す

大阪市内西成區千本通五丁目七

▼投吟 麻生路郎氏宛

化粧新聞社

○川柳雜誌投句用箋

▼本社規程の投句用箋を左の價格でお頒ち致します。なるべく此用箋を御使用下さい。

五〇枚綴二冊價金拾二錢

(送料共)

▼御申込は本社事務所宛 (一錢切手代用不苦)

# 清 酒

## 白 鶴 禮 讚

白鶴をチントンシャンと提げて来る  
 午後六時白鶴が待ち妻が待ち  
 百事意の如く白鶴呑んでゐる  
 白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子  
 腰掛へ白鶴狭う飲むまよさ  
 來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ  
 白鶴が縁こはなりぬ君も僕  
 白鶴に素直な父こなつて寝る

攝津灘

嘉納合名會社釀



入ま十三、三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）  
昭和六年十一月廿五日印刷、昭和六年十二月一日發行

川柳雜誌

（第九十五號）

定價金三拾錢

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

# ドーマポ椿豆伊

精の椿島大 一唯産國

輝く美髪



伊豆椿香油本舗

いさ下川愛御に直今  
りあに店薬品粧化名有國全